

『ブルーアイズヒーロー』シリーズ

【登場人物】

・ロバート・クロス

主人公。貧民街の出身だったが、自身的美貌を使い売春で、ヴァルナ社の社長に昇りつめる。

・イーサン・カーター

ロバートに育てられた少年。運動神経がよく射撃と手芸が得意。暗殺業を始める。勉強はすこぶる苦手。

・アン

ロバートが恋する女性。ブラフマー街の貧しい娼婦。娘をロバートに託し、病死する。

・ジェフエリー・ボールドウィン

ロバートの部下兼お目付け役。

・マッテオ・ラモリーノ

ロバートの部下。イタリアからの移民。

・中島昌義

ロバートの部下。日本からの移民。

・ナヒマナ

ロバートの部下。ネイティブアメリカンの生まれの女性。

・アレック・バルダーソン

ロバートの友人。第一次世界大戦に出兵し、無事帰還するも自殺する。

・ジョン・ヘイスティングス

ロバートの友人。第一次世界大戦に出兵後、帰還。アレックの死を受けてロバートと破局する。

・パトリック・オーウェル

ロバートの友人。教会の一人息子。優しく面倒見がいい。

・ヴァイオレット・デイケンズ

シヴァ街の高級娼婦。ロバートの愛人の振りをする。

・ヴァレリア・デュヴィーヌ

シヴァ街の期待の新人娼婦。イーサンのお気に入り。

・グレース・マクファーレン

没落貴族の令嬢。気位の高い美少女でロバートを毛嫌にする。

・ロレンス・エベレット

製薬会社の若手社長でグレースの婚約者。ロバートにその才能を見込まれ、毒ガス作りに利用される。終戦時に心を病み、自殺する。

【重要用語】

・シヴァ街  
ネオンライトタウンの三つの区分の内、最も豊かな街。現在、ロバートとイーサンが暮らす。

・ヴィシユヌ街  
三区分の内の真ん中。中間階級の人々の住む街。

・ブラフマー街  
ネオンライトタウンの最底辺に位置するスラム街。ロバート、イーサンの出身地。

・ヴァルナ社  
ネオンライトタウンで最も力のある会社。マフィアと癒着があり、悪い評判が絶えない。

【前回のあらすじ】

貧しい生まれのロバートは、自分の美貌やたった一人の家族であるイーサンの暗殺の才能を使って、ネオンライトタウンのトップであるヴァルナ社の社長へと昇りつめた。

たった二十歳で社長となった彼の元に、やがて第一次世界大戦の波が押し寄せる。戦争を利用し、鉄鋼の貿易でロバートは巨額の富を得るが、やがて輸出品を毒ガスに変える。その毒ガスの製作に、ロバートはロレンス・エベレットという製薬会社の社長を利用しようと目論む。非人道的な毒ガス作りに、エベレットは賛同しないが、ロバートの「強い武器があれば早く戦争を終わらせられる」という甘言に騙されて、作成に同意してしまう。

そんな中、とうとうアメリカの参戦が決定される。友人が徴兵されることにロバートとイーサンは不安な思いを抱くが、友人達は参戦に歓喜していた。やがてアレックとジョンの出兵が決まり、ロバートとバト

リックは不安な気持ちを隠して笑顔で二人を見送った。しかしイーサンだけは、最後まで二人を引き留めようとしていた。

アメリカは順調に勝利を収め、やがてすぐに戦争は終わった。アレックとジョンは二人とも無事に帰還し、残された人々は彼らの無事を喜んだが、アレックは帰還した翌日に突然自殺する。彼の死の原因が、人々を自分の金儲けのために戦争へ焚きつけた自分にある、と理解したロバートは、徐々に心を病んでいく。そして追い打ちをかけるようにエベレットまで自殺してしまう。打ちひしがれるロバートにイーサンは、自分が救われるためにも恋人のアンの元に行き愛を告白しろ、と伝える。

ロバートはアンの元へ向かうが、彼女は瀕死の状態だった。死に際で二人は愛を確かめ合い、アンは最後の頼みとして「自分が客との間に作った娘を育ててほしい」と伝える。ロバートが了承したのを確認し、アンは息を引き取る。

こだま

挿絵：市川司幸

アンの死を完全に感じ取ったのは、あの接吻から十五分後のことだ。私はそつと彼女の上掛けを直し、手を胸の上で組ませた。そして最後に彼女の顔を見つめ、やがて立ち上がった。ズボンの皺を伸ばし、遣り手を呼ぼうと扉の方を向いた。

その時、扉が勢いよく開き、木の腕を持ったひどくやせっぽちの少女の姿が現れた。少女と私はしばらくポカンと見つめ合った。しかし、怪しさなら私の方が勝っていたのか、やがて少女の痩せこけた頬の中の、変に大きい目がぐつと狭められ、「誰？」という低い声が出た。

私は何と答えたらいいのか分からず、「ああ」だの「うん」だのもごもご繰り返したが、この風体が余計不審に映ったのか、少女はスタスタと私の脇を通り過ぎて行った。

「どいてよ、おじちゃん。あたしはママにお水あげなきゃなのよ」

少女は幼い割にははきはきと言つてのけ、寝台の傍へと歩み寄った。

ああ、そうか！

私ははつとして、彼女を振り返った。そうか、この子が！

「ママ！ お水持ってきたよ！」

少女はちゃぶちゃぶと水音を立てる腕をアンの唇に当てがった。しかし、水は喉に落ちることなく、口の端から流れ落ちて行った。

「ママ、どうしたの？ 寝ちゃやよ、起きてよ」

私は不思議そうに母親を揺り動かす彼女に歩み寄り、すくと膝を床につき、優しく言った。

「もう起きないよ」

「違うもん、起きるもん！」

少女は怒りを込めて私を睨んだ。

「ママはよく寝ちゃうけど、あたしが行くと起きるもん。だから起きるもん！」

「君のお母さんはね、死んでしまったんだよ」

死ぬ、という単語が、幼児に理解できるのかは分からなかった。しかし少女は突然怒りの表情を引っ込め、代わりに啞然とした顔をした。ポロポロと意味のない涙が睫

毛の下を伝い落ちていった。彼女はもう一度「ママ！ ママ！」と呼びかけたが、返事が一向に返ってこないことが分かると、突然火が付いたように泣き出した。

彼女は私の幼少期、そしてすべてのブラフマー街の子供達と同じだった。死の名前は知らなくても、死ぬということがどういふことかは分かつているのだ。それは誕生よりもずっと優先して学ぶことだった。

少女はしばらくアンの亡骸に取り付いて泣いていたが、突然に亡骸から離れ、生者である私に抱き着き、泣きじゃくった。私は好きだけ彼女に服を汚させた。この子の中で、悲しみは不安になったのだ。死の悲しみから生きていくことへの不安を押し付けたい一心で、見ず知らずの私にしがみ付いている。

俺もこうしたかった。誰かに抱き着きたかった。

「こっちを見なさい」

私はわずかに彼女から体を離して、頬を上向けさせた。

「私を見なさい。しっかりと、両の目を開け

て」

少女の涙は幾分か収まったようだった。それでも揺れ動く瞳が、私に縋るように注がれた。

「よく聞きなさい。お母さんが亡くなって、さぞ悲しいだろう。たくさん悲しむといい。でも自分は一人ぼっちだなんて思うのはよしなさい。お前は一人なんかじゃない。お前には私達がいる」

「おじちゃんか？」

「そう。私達がお前を一人ぼっちなんかさせやしない」

私は少女の頬を両手で包んだ。痩せこけた頬だったが、確かに血が流れていた。

「私はお前のお母さんに言われたんだ。お前を引き取って育てるようになって。決して一人ぼっちにさせちゃいけないって」

「おじちゃん、一体誰なの？」

「そうだったね。私はロバート・クロス。君のお母さんは、私にとっても大事な人だった」

少女はまだ分からない、というように小首をかしげていた。その様子は大層可愛ら

しかった。

「お前は何て言うの？」

「メアリ」

少女は小さく、おずおずと呟いた。

「メアリ・クリスティーン」

「そうか。メアリ。オーストリアのお姫様と同じ名前だね」

私は頬をはさんでいた両手で、彼女の荒れた手をそっと取った。

「ねえ、メアリ。一緒に行こうよ。これからは私のおうちで暮らそう。ここよりずっと広いお部屋も綺麗な服も、いっぱいあるんだよ」

メアリは困惑してじりじりと後ずさった。清純な瞳が、迷いの中で揺れていた。「ママがほんとにそう言ったの？ おじちゃんと一緒にってほんとにそう言ったの？」

「本当に、だよ」

私は床に腰を下ろして、少女の顔を横から見た。こうすることで、彼女の目が私の目の高さと同化した。

「アンはね、最後までお前を気にかけてい

たんだよ。自分の一番最後のお願いに、娘を引き取ってくれて言ったんだ。お前が困らないように、お前がお腹を空かせないように、一人ぼっちで寂しくないように、あの人は最後の力を振り絞って私にお願いをしたんだよ。だからね、メアリ。私を信じてくれないかい？　そして、君のお母さんの最後のお願ひも一緒にね」

「ママは、あたしを一人ぼっちにしない？」

メアリは、縋りつくように言った。今さっき初めて知った、そして自分が思わず抱き着いてしまった目の前の男に、おずおずと近寄った。

「おじちゃん、あたしを一人ぼっちにしない？」

「しないさ」

私は笑って頷いた。

「絶対」

メアリは頬にうっすらと残っていた涙の筋を、服の袖で強くぬぐった。

「さあ、おいで。行く前に、お前のお母さんにさよならを言いなさい」

私はメアリの手を引いて、アンの寝台の

元へ歩み寄った。寝台の上に置きっぱなしの木枕を手に取り、ポケットから出したハンカチを、腕の中の水に浸した。

「ほら」

そう言っつて、メアリに濡れたハンカチを渡した。

「これでお母さんの口を拭いておやり。最後のお水をあげるんだよ」

アンの乾いた唇を震える手で拭うと、メアリは再び押し込めていた涙を流した。小さな赤い鼻をひくひくと動かしながらしゃっくりをするメア리를、わたしはそっと抱き寄せた。メアリは抵抗することなく、私のシャツで涙を拭いた。

「ママ、痛かった？」

怯えながらメアリは聞いた。

「まさか」

と、私は首を振った。

「アンは何にも痛がりやしませんでしたよ。死ぬ、ということは天使になることと一緒に。苦しいわけがないでしょう。それに見てごらん」

メアリの顔をそっとアンの方へ向けて

やると、潤んだ唇で目を閉じている死に顔が、彼女の瞳の中に映った。

「嬉しそうに笑ってるでしょう？　お前が持つてきてくれたお水を、最後に飲めてよかったって喜んでいるよ」

メアリはそれを聞くと、そっと母の額にキスをした。そして私の方へ駆け寄ると、胸に頬を押し当てた。首に細い腕が回され、私はメア리를抱き上げて立ち上がった。筋力のない私でも楽に持ち上げられるほど、彼女の体は軽かった。

部屋を出る寸前、私はもう一度アンの姿を顧みた。彼女の姿は、今私がしなければならぬことを指し示すように、毅然と横たわっていた。早く行きなさい。この部屋を出るための一歩を踏み出しなさい、と。

下に降りていくと、遣り手をはじめとした娼婦達はたちまち目を丸くした。

「旦那、アンはどうしたんです？」

と、遣り手は白い顔で尋ねた。

「亡くなった」

「そんならその子は……」

「旦那。それでしたら旦那」

遣り手の白髪頭が激しく揺れた。

「お渡しできません！ そんな理由ではお渡しできません！」

私はしばらく黙った。すぐに再び口を開いた。

「この子は俺が連れて行く。止めたって無駄だ。俺はこの子と一緒に行く」

次は何も言われなかった。それを見て、私は片手でポケットから財布を出し、遣り手に渡した。

「これは身請け代なんかじゃないぞ。埋葬代だ。ヴィシユヌ街にパトリック・オーウエルという牧師がいる。その人の教会に、彼女の遺体を頼んでくれ」

「ありがたく頂戴しやしよう。しかし、葬式はしませんだ」

遣り手は安らかに笑った。

「墓を建てるだけにしますだ。あの子は仰々しいもんは嫌う性質ですから、式などしたら嫌がるでしょうよ。代わりに、墓をあの子の好きな花で覆ってやりましょう」

私は彼女に深々と頭を下げた。そして腕の中のメア리를揺すり上げ、「さようならをお言い」と囁いた。

「さよなら、おばちゃん」

メアリは私を真似してちょこん、とお辞儀をした。

私達二人が歩き出すと、後ろから娼婦達の声が聞こえた。あまりに小さな細かい声であったから、何と云っていたかよくは聞き取れなかった。しかし、こう云っていたと思う。

「元気でね。幸せでね」

なにがなんだかさっぱり分からない、というような顔の運転手にハンドルを任せ、私とメアリは車に揺られて家へ帰った。メアリは初めて乗る車の窓に張り付き、高速で流れていく景色に釘付けになった。

あの時と、彼女は同じだった。私とイーサンが初めて馬車に乗ってシヴァ街に言った時。あの時の赤い頬と弾む息が、そのまま彼女に移ったかのようにだった。

「メアリ。危ないからちゃんと座りなさい」私が腰を抱えると、メアリは大人しく従って、私の膝の上に座った。何か月も洗っていないだろう髪に触れると、手のひらがべたべたした。こんな感触は何年も忘れていた。

運転手のみならず、私の帰りを待っていたヴァルナ社のメンバーは全員困惑の中に叩き落された。当たり前である。社長は花嫁を迎えに車を出したのだ。十歳にも満たない女の子を迎えに行ったのではなく。私は玄関ホールでメア리를抱きかかえ、そのまま、どうしたものか、と首を捻った。まずはどこから説明するべきなのか。

しかし、その時突然、  
「ロバート！」

と若々しい少年の声が頭上に降りかかった。見ると、イーサンが大理石の階段を数段飛ばし飛ばしで駆け下りていた。しかし、私が女の子を抱えているのを見ると、ぎよっとして立ち止まった。

「イーサン、来なさい」

イーサンはどこか怖がってでもいるかのように、私とメアリに近寄った。

「見てごらん」

と、私はメアリを持ち上げた。

「お前の妹だよ」

当のメアリは、目の前のイーサンなど知らん顔で、玄関ホールの大大理石の階段だの、ガラス張りのエレベーターだのにぼうっと見惚れていた。イーサンはすらりと伸びた背を折り曲げてエレベーターの方を指さし、メアリにそっと囁いた。

「あれが何か分かる？」

メアリはようやく、イーサンに気づいた。そして自分のすぐ隣に、顔立ちの麗しい年上の少年がいることに、たちまち顔を赤くした。

「あれはね、エレベーターといってね、部屋が動いて行きたい場所に連れてってくれるものなんだよ」

「そうなの？」

「うん」

イーサンは目線をメアリの方へ移した。

「名前は何て言うの？」

「メアリ。メアリ・クリステイン」

「そう、始めましてメアリ。俺の名前はイーサン・カーター。今日からお前の兄さんだよ」

一際甘い笑顔で言うと、次にイーサンは私に真面目な顔を向けた。

「この子は？」

「俺が連れ帰った。今日からうちの子だ」

「そうか」

イーサンは一つだけ頷くと、使用人や社員の列の方へ体を向けた。

「この子は今日からここで暮らすことになる！」

彼はよく通る声で叫んだ。

「この私の妹であり、ロバート・クロススの娘だ！」

イーサンの声に続いたのは、若い女の声だった。今ではメイド長に就任したミリーの声だった。

「現在、ここにいるメイドに指示を出します！ ハウスメイドは取り急ぎ、客間のお風呂を用意しなさい！ キッチンメイド

は六時までにお嬢様の分の夕食を食堂に！ 噛みやすいスープにするのよ！ 分かったら解散！」

彼女の一声で、まるで特別なことなど何もなかったように、使用人は散らばり、社員もオフィスに引っ込んでいった。

「さて」

と、私はずり落ちて来たメアリを揺すり上げて言った。

「お風呂に入ろうか」

風呂でメアリは大暴れした。女の子を男が洗うわけにもいくまい、と私はメイドに彼女を託したのだが、知らない大人に突然裸にされたメアリは恐怖で大泣きし、風呂場から脱走しようと四肢を振り回してメイドを大いに困らせた。

「旦那様！ お嬢様はやっぱりあなたでないと駄目なようですわ！」

と、言われ仕方なく、ズボンもシャツの袖も捲ってメアリを洗った。今度は大人しくされるがままだった。

大変なのは風呂だけでなく、食事もだった。メアリは食卓に並べられたスープやサンドイッチを目にすると、たちまち手づかみでガツガツと食べ始めた。

「落ち着いて食べなさい！ お腹を壊すよ！」

と、何度言っても聞かず、終いには案の定気持ち悪くなって、洗面器一杯に吐いた。

「だから言わんこっちゃない！ 全く！」

と、私は高価な服を盛大に汚されながらも、彼女の背を摩った。メアリは苦しきあまりわんわん泣いたが、次第に泣くのも吐くのも疲れて、うとうとし始めた。

私は自分の部屋に彼女を連れて行った。温めたミルクを飲ませ、口をゆすがせてベッドに寝かせてやると、メアリはすぐに眠りに落ちた。

寝台の縁に腰掛けて、私は深くため息を吐いた。

「いろいろあったねえ」

と、眠るメアリに呟いた。

「ごめんよ。こんな所に寝かせて」

メアリが眠るベッドは穢れていた。ここ

は、貧しくお腹を空かせた女の子が眠る場所ではないのだ。ここは私の場所だ。そして先代社長リズリー氏のものでもあり、そこから鎖のように続く、トップ達のものだった。

「でも、いいじゃないの」

私はそつと微笑んで呟いた。

いいじゃないか。貧しくお腹を空かせた女の子が寝ていたって。それだっていいじゃないか。メアリがここで寝てくれたから、ここはもう私の場所ではなくなったのだ。そう思うと、この子が全部綺麗にしてくれた気がした。全部。

メアリが眠ったことを確認すると、私はイーサンの部屋へ向かった。彼とは、いの一に話さなくてはならなかった。

しかし、扉を開けると私は話す内用すら忘れて呆気にとられた。部屋中がトルソーやらカラフルな布地やらで埋め尽くされ、その真ん中で、黒い巻き毛がミシンの音に合わせて忙しく動いていた。

「何をやってるんだ、お前は」

そこでようやくイーサンが顔を上げた。

「あの子の服は全部俺が作るんだからね」

「作る？ 買おうと思ってたんだが」

「やなことだ。俺が作るんだから。遊び着

も余所行きも、寝間着も全部。なんならウエディングドレスも」

それっきり、凄まじい速度で打ち込まれる針の音だけがしばらく部屋に響いた。イーサンは作業に集中し、私もできあがったばかりのピーチピンク色のワンピースを指で弄りながら黙り込んだ。

やがて、ミシンの針が逆方向に進む音が響いて、パタリとやんだ。針を布から引き抜き、イーサンがぼつりと呟いた。

「アンは？」

私はなおもワンピースの裾をつまんだり離したりしながら答えた。

「死んだよ」

「そう」

イーサンはそれ以上何も聞かなかった。相変わらず下を向いて、ミシンのペダルを踏み続けていた。きつと彼は沈黙から全て



を読み取ったのだろう。アンと私のこと、メアリのこと、メアリと私のこと。

「あの子、お前にそっくりだよ」

と、私は一心に服を縫い続けるイーサンに呟いた。

「俺に抱き着いてきた。お前がまだ生まれただばかりの時、なんの関係もない俺に抱き着いたのと同じように、あの子は俺に触ってくれたんだ」

「そりゃそうだろう」

イーサンはミシンの針を調節しながら笑った。

「俺の妹なんだから」

ミシン台から布地が引き抜かれると、それは真っ白なレースが取り付けられた、花柄のブラウスだった。

「あの子にいっぱい服を作ってやろう。フアッション誌を毎日チェックして、最新の流行もちゃんと勉強してき。そんで、もう少し大きくなったら、自転車乗り方やらバスケットボールのルールやら、側転の仕方やらいっぱい教えてやるんだ」

「側転!? あの子は女の子だぞ。」

側転なんかできるもんか」

「いいや、できる。あの子はきつとなんだってできる」

誰に話しかけているのか分からなかった。だがイーサンは迷子の子供に道を教えるような明るく強い声で言い続けた。

「俺の手はあの子のために使うんだ。あの子のために、俺の手を使うんだ」

翌朝、私は太陽の出る前に目を覚ました。

メアリはまだ私の傍らで眠っていたが、すぐに着替えて地下の調理場に降りて行った。ほの暗い調理場では料理番の女達が、オレンジ色の電球の下であくせくと動いていたが、私の姿を見ると驚いて固まった。

「邪魔して済まない」

と、私は少し頭を下げ、エプロンを一着借りて身に纏った。

「今日から食事は私が作る。君達はそのまま、社員の分を頼む」

「旦那様はお料理がおできになるのですか?」

と、一番若い娘が、うっかり失礼なことを言っただけで、いやな顔ながらもおぼろげと尋ねた。

「あの子は、俺は十歳にもならない内から包丁を握ってたんだよ。万が一だつて焦げた目玉焼きを食う羽目にはならないさ」

そう余裕綽々言っただけで、私は野菜の皮をするすると包丁で剥き始めた。料理番達は、私が調理場を火事にするほど料理音痴ではないと知り、銘々の仕事に戻った。

野菜と燻製肉をスパスパとスライスし、鍋に水を張ってさあスープを煮るぞ、という所で私は先ほど怯えていた娘を呼んだ。

「何かお困りでも?」

と、彼女はなごも上目遣いで私を見た。「いやね、この焔炉は一体どこに石炭を入れるのかな、と」

「まあ、石炭!?!」

娘は先ほどの気弱も忘れて素っ頓狂な声を上げた。

「旦那さまったら! これはガスで点火するのですよ!」

料理番の娘に散々からかわれながらも何とか朝食を作り終え、ついでに彼女に「へへーだ、石炭仕込みのこの激うまスープを試してみろやい」と捨て台詞を残し、私は自分の寝室に戻った。メアリはもう起床しており、イーサンと二、三人のメイドに囲まれ、昨夜出来上がったばかりの、緑の格子柄のドレスを身に着けていた。

「どうだい、着心地は。苦しくないかい？それとも大きすぎやしない？ チクチクしたりする？ 大丈夫なの？」

と、イーサンは彼女の横でびーちくびーちく捲し立てていたが、当のメアリはぼろりと鏡の中の自分に見惚れていた。

「綺麗な着せてもらったねえ」

私は彼女の隣に膝をつき、一緒に鏡を覗き込んだ。

「お前は緑がよく似合うね。目の色が同じだからかな」

綺麗な服に気後れしていたメアリは、ようやく恥ずかしそうに笑った。

「このお洋服はこのお兄ちゃんが作って

くれたんだよ。ありがとうを言おうね」

メアリは小声で「ありがとう」とイーサンに呟いた。イーサンは嬉しそうに、白い頬をバラ色に染めた。

三人で朝食を囲んだが、食堂のテーブルは明らかに大きすぎた。

「スペースが余り過ぎてるな」

と、イーサンはパンを噛み千切りながら言った。

「今まで食事は自分の部屋で取ってたから気づきやなかった」

「丸テーブルがいるな。あと柄物のテーブルクロス」

私とイーサンは、メアリの前で大層行儀悪く食べた。パンは手掴みで食いちぎり、

スプーンはスプーンも使わず直接口づけで

ズーズー音を立ててやった。そのおかげか、メアリも落ち着いてパクパクと元気に食べた。

「メアリ、お代わりいる？」

と聞くと、メアリは素早くうなずいて空のスプーンをぐいっと差し出した。

午後になると、イーサンは縫い物に戻ったが、私は電話で昌義とマツテオを呼びだした。日曜日にも関わらず、二人はすぐに私の部屋へ現れた。

「女の子を引き取ったから買い物に付き合っしてほしいと言われたときは驚きましたけど……」

と、マツテオはメアリを抱く私を見て訝しげに言った。

「こういうことは現役パパのジェフェリーさんに頼んだ方がよいのでは？」

「子持ちを日曜に呼び出せるわけないだろう。お前らと違って、ジェフェリーは家族サービスで忙しいだろうからな」

「あなた僕達のこと何だと思ってるんですか」

昌義が遠慮なく私を睨みつけた。しかし二人は気前よく車を運転し、私とメアリの買い物に付き合ってくれた。

家具屋、靴屋、帽子屋と大忙しで店を回ったが、困ったことにどの店に行ってもメアリは一向に自分の意見を出さなかった。

「お前、好きなものを選んでいいんだよ。お前のベッドを選んでるんだからね。さあ、どれがいいのか言っごらん」

と、いくら言っごも、メアリは困ったように「うーん、うーん」と唸るばかりだった。結局は、昌義とマツテオの二人で「これはどうですか、あれも見えますか」と誘導するしかなかった。

とはいえ、何とか必要なものは買い揃えられた。おやつに、少し高めのチョコレートを買っごやると、メアリはたちまち目を輝かせ、車の中で一粒ずつ夢中で食べた。「五個までだからね、ご飯が食べられなくなるから五個までね。お前、そんなにチョコレートが気に入っごたの?」

そう聞くとメアリはガクガクと頷いた。「食べたことあるの?」

「あたし、ない」

メアリは銀紙を丁寧に折りたたみながら言っごた。

「でもママはあるっご言っごた。すっごくすっごく美味しっごたっご言っごたよ」

夕食のブラウンシチューを景気よく食べて満足したのか、メアリはすぐに眠気を訴えた。

「お前のお部屋は明日にはできるからね。まだちょっとここで我慢してよ」

と、私はメア리를布団で包んで寝かしつけながら言っごた。

「あたし、ここがいい」

メアリは欠伸交じりに言っごた。

「そういうわけにもいっごかないよ。おじちゃん、明日にはお仕事に戻らなきゃいっごけないからね」

私は誤魔化すように言っごた。そんなことを言われるとは思っごていっごなかったから、唐突に頬が赤くなっごた。このベッドで眠りたい人間などいっごないと思っごていた。ここで私の体を求めたい、と願う人間は数多いが、眠りたい人間などいっごないだろう、と。

私の声をメアリは結局聞いていっごなかった。すぐに安らかな寝息が上がり始め、布団が呼吸に合っごせて上下した。私は明かりを消そうとサイドテーブルに手を伸ばし

た。

その時、扉がすうっと音もなく開いて、絵本を抱えたイーサンが忍び足で入っごきた。

「寝ちゃっごた?」

「ああ。それは明日読んであげなさい」

イーサンは構わず私に並んで寝台の端に腰掛けた。

「明日があるっご思っごてよかっごた」

彼はじつとメアリの顔を眺めた。私も彼に倣っごて彼女を見つめると、そこに母親の面影をいくつも見つめた。赤銅色の真っ直ぐな髪、今は瞼に覆われている緑の瞳。しかし、母親から受け継いだものは、どれ一つとしてアンと同じものではなっごた。

「この子が独り立ちするまで、結婚はしないことにするよ」

「そう」

私は顔を上げてイーサンを見つめた。

「いいのか? 長い年月がかかるんだぞ」

「長い年月をかけなきゃいっごないんだ」

イーサンは寝台の上に屈んで、メアリの額に唇を当てた。

「人の一生には、長い長い年月がかかるんだから」

イーサンは睫毛の先に乗った雫が、電灯の下できらきらと光っていた。

メアリの私室ができてから、仕事の他に忙しいものが増えた。読み書きに計算、ナイフやフォークの使い方。それを教えるのも私達の役目である。

ところが、一つ困ったことになった。今まで新しい環境に戸惑い、しおしおとお姫様のようにしとやかだったメアリが突然急変したのだ。

メアリはすっかり狂暴でわがままな女帝へと変貌した。まずはアルファベットが分からない、と大泣きした。足し算の繰り上げ方が分からない、と癩癩を起した。上手くフォークが使えないとそれを床に叩きつけた。注意するともっと泣いた。とにかく泣いて泣いて、火の付いたように泣き喚いて、周りの大人たちに当たり散らし、物をいくつも壊した。私やイーサンに対す

る当たりはもっと酷かった。暴言を吐くのはともかく、時には引つかかれ、叩かれ、噛みつかれ。そのおかげで体中絆創膏だらけだった。

あんなに参ったのは初めてだった。イーサンがあまり手のかからない子だったせいか、度を越した我儘には慣れていなかったのだ。いくつもの子育て本を参考にして叱っても、メアリは聞く耳を持たなかった。どれだけ優しく言っても聞かせても、分かってくれなかった。

それでも、メアリの憎らしく思う気持ちにはなかつた。たった一人の親を亡くし、見たこともない場所に連れていかれ、面識もない大勢の大人達に囲まれ、怖くて不安で、どこまで自分が受け入れられるのかわからなくて、こうして癩癩を起して泣き喚くことで必死に耐えているのだ、と私は分かっていた。

だから辛くても投げ出すわけにはいかなかった。「じゃあ勝手になさい！」などと決して言っただけではいけなかつた。叩いて、暴力でねじ伏せてはいけなかつた。ただ、

あの子の気が済むまで、好きさだけ、一緒にいてあげた。

その日のメアリの癩癩は一層ひどかつた。いくら教えても彼女は「Q」が上手く書けず、とうとう「もう嫌！」と叫んで鉛筆を投げ捨てた。まあそこまではいつものことなので、私も「さあ、そう言わないでもう一回やってみよう」と落ち着いて言ったが、今日のメアリは過去にないほどヒートアップして泣き喚き続けたのだ。

「嫌！ やらねったらやらねえ！ こんな嫌だ嫌だ！」

「落ち着きなさいったら、ね？ ゆっくりでいいからやってみよう」

「嫌！ こんなの大嫌い！ みんなみんな大嫌い！」

メアリは泣き濡れた顔で私を睨んだ。彼女の様子に驚いたのか、イーサンやミリーや昌義まで書斎に入ってきた。「みんな大嫌いだ！」と、メアリはもう一度叫んだ。

「こんなところも大っ嫌い！ だあれもあたしのことなんか好きじゃないんだ！ あたしはママがいないのに！ ママがいないのに！ あたしは一人ぼっちなのに！」

一人ぼっち。そう聞いた時、私の血がカッと熱くなった。気づけば大声で「馬鹿言うんじゃない！」と怒鳴っていた。

「そんなの俺だって一緒だ！ 俺だってお前くらいの年に母親を亡くしたんだ！ 一人ぼっちだったんだ！ 誰にも甘えられないし、誰も気にかけてくれなかった！ でもお前は違うじゃないか！ 私達に好きさだけ八つ当たれるじゃないか！ 甘えられるじゃないか！ お前は気が済むまで我儘を言ったっていいんだ！ 好きさだけ泣いたっていいんだ！ 八つ当たりしたっていいんだ！ お前は一人ぼっちなんかじゃない！ 私達がずっとそばにいるじゃないか！」

メアリは泣かなかった。ぼかん、と乾いた涙の痕を引きつけて黙っていた。しばらく黙り込んでいたが、やがて彼女は私を

突き飛ばして書斎を駆けだしていった。

その日の残りは悶々として過ごした。どうしても片づけなければいけない仕事を沈んだ気分が終わらせ、すぐに夕食を用意したが、メアリは食卓に現れなかった。部屋に食事を運ぼうとしたが、緊急の電話が入り、急いで取引先に向かわなければならなくなり、私は盆をメイドに託した。

帰った頃には、もう十時を回っていた。さすがにもう寝ているだろう、とダメ元でメアリの部屋に向かったが、ドアの取っ手に手をかけようとした時、指がはっと強張った。

メアリは起きていた。そして泣いていた。泣き声が扉の外へ漏れていた。いつもの見せびらかすような喚き声ではなく、食いしばった歯の奥から絞り出すような声だった。

（お前は変わったのではなかったんだな）  
と、私は一人思った。  
メアリの正体はずっとここにいた。寂し

くて辛くて、それでも私達には気づかれないようにここに仕舞い込んでいた。

迷いながらも私は部屋に入った。すぐに枕から持ち上がった濡れた顔が、私を真っ直ぐに見つめた。

「メアリ」

と呼びかけて寝台に腰掛けても、彼女は逃げ出すこともなく、噛みつくこともなかった。

「おいで」

メアリは何か迷ったようだ。はっと見開いた目で私を見つめ続けた。私も迷いのもった眼で彼女を見た。それでも彼女を抱くための腕を真っ直ぐに伸ばした。メアリの迷いを、私の迷いが打ち断った。気づけば柔らかな体が胸に触れていた。

「ママがいないの……」

メアリは私の頬に、自分の頬をつけて泣き続けた。

「優しい人もご飯も綺麗な服もあるのにママだけいないの……。ママに会いたい。一回だけでいいからママに会いたい！」  
後悔がゆっくりと心を満たした。お別れ

など済んでいなかったのだ。当たり前だ。この子は自分の血を失っているのだ。俺なんかがアンの代わりになれるわけがない。いや、なっちはいけないのだ。

「メアリ、分かったよ」

私は立ち上がってクローゼットを開け、コートを取り出した。

「ママに会いに行こう」

夜遅い時間に、私は荷台にメア리를乗せて自転車を飛ばした。普段はやかましいシヴァ街が、その時は私達のためであるかのようにしんと静かだった。冷たい風が頬を叩く中、メアリの細い腕が腹にきつく食い込んだ。

ヴィシユヌ街のある建物の前で、私はようやく自転車を止めた。アンの前に会わねばならない人が一人いる。私はメアリの手を引き、扉を叩いて彼を呼んだ。

「パトリック！ パトリック！ 俺だ、ロバートだ！」

寝静まった街の中に、私の声だけがしば

らく響いた。メアリが寒そうに私に縋りつく。しかし、五分ほどたって、あの懐かしい顔が扉から現れた。

「ロバート？ 君、こんな時間に一体……」

「ああ、パット！」

寝る直前だったのか、パジャマ姿のままのパトリックに、私は縋りついて言った。

「頼む、パトリック！ 一つ確認したいんだ。以前、アンナ・クリスティーンという女性を埋葬しなかったか？」

「アンナ・クリスティーン……」

パトリックは顎を細い指で押さえたが、やがてはつと瞼を跳ね除けた。

「ああ、そうだ！ ちょうど何週間か前にブラフマー街から遺体が運ばれて……」

「合わせてくれ！ 頼む！」

絶叫に近い声で言うと、パトリックはぼかんと口を開けた。そしてようやく私の片手にしがみ付いているメア리를見た。

「その子は……」

「メアリ・クリスティーン。彼女の娘だ」

パトリックはしばらくメアリではなく私を見つめていた。永遠とも思われる時間

の後、パトリックは扉を大きく開けた。「入ってくれ」

長く静かな講堂を通り抜け、一度外にある渡り廊下を渡ると、私達は小さな住居に入った。ここが言わば管理者、オーウェル一家の住まいだった。

パトリックは壁に取り付けられた無数のフックから鍵を一つ取って私に渡した。

「行っておいで」

彼は鍵を渡すと、キッチンテーブルに座った。アンがどこにいるかも教えてくれなかったが、私はそれに感謝した。

糸杉の木の下の墓石が、ランプの光に照らされる中、メアリは希望に満ちた瞳で墓地を進んだ。ここに立ち並ぶ墓石の土の下にあった物語を、彼女は何も知らないのだ。

アンの墓を捜し歩くうちに、いくつかの意思に刻まれた文字がランプの明かりに照らされた。アーノルド・リズリー、ロレ

ンス・エベレット、アレクサンダー・バルダーソン。昔の人の石の前に足を進める度、靴の先が土に引っかかった。そんな私の手を、メアリは迷いなく引いて行った。

進むうちに、墓石が真新しくなっていた。供えられた花もみずみずしく、土も起こしたてのように盛り上がっていた。

「あ」

と、メアリが小さく呟いた。彼女の視線をなぞると、溢れんばかりの白いユリの花で覆われた小さな墓石が目にとまった。

「ママー！」

メアリが私の元を離れた。そして迷わず墓石へ向かい、石に抱き着いて大声で泣いた。二人の周りに、私は近づかなかった。彼女の気が済むまで泣かせてやった。二人きりにしても大丈夫だと知っていた。メアリは昔の私のように、母の死体を掘り起こして自殺してしまおうなどとは、決して思わないだろうから。

私はメアリが泣き止み、涙を拭き、しゃっくりをまだ引き摺りながら私に抱き着くのを待った。

「ママ。あたし淋しくないみたい」

泣き声を止ませたメアリが、ぼつりと一言そう言った。

北風吹きすさぶ墓地から戻ると、オーウェル家のキッチンが蜜付けレモンの香りと一緒に私達を出迎えた。

「寒かったでしょう。はい、これ」

と、パトリックはメアリに湯気の立つココアを渡した。メアリがふうふうとココアを吹きながら飲み干す横で、パトリックと私はブランデー入りの紅茶を煽った。ココアを飲み干したメアリは、やがて私の腿を枕にして眠り込んだ。

「何があつたかは聞かないでおく」

目が合うとパトリックが言った。

「大体察しが付く。君は分かりやすいからね」

「そう」

「そう。自分は普通とは思ってらっしゃったようだけど」

私は酒で火照った顔を手で仰ぎ、「あち

い」と呟いた。

「だが、肩書だけなら君はもう普通の人間じゃない」

パトリックは硬い表情で、カップの水面を見つめた。

「君はその子を育てられるのか？」

「難しいことは皆目見当もつかんよ。子供の叱り方も、習い事や学校のこと、手探りでやっていくしかない」

私は眠るメアリの髪を撫でながら言った。

「でも俺もイーサンも、この子のことが好きだ。この子に会えて、ようやく明日が来ることの幸福が分かったんだ。何だかってできてしまうような、そんな馬鹿みたいな勇氣が湧いてくるんだ」

「ロバート。僕は牧師だ。人に道を信じることを教える人間だ」

パトリックは目を閉じて言った。

「だから君のことを信じ続ける。ずっとそうしてきたように。でも、どうしても困ってしまったら、そしたら寄り掛かりにおいて。イーサンも一緒に」

教会を出ると、私はゆっくりと自転車をこいだ。メアリが眠りの覚めない顔を、私の背にくっつけていた。夜風を切つてペダルを強く踏み込んでいると、ふとメアリが呟いた。

「ごめんなさい、クロスさん」

私は驚いて足をペダルから踏み外した。かろうじてブレーキをかけたおかげで、横転は避けたが、驚きのあまり素っ頓狂な声を上げた。

「え！ なんだって!？」

「ごめんなさい、と言つたのよ、クロスさん」

「いや、そこじゃない、お前、だって発音が……!」

ついさつきまでめちゃくちゃな下町訛りのメアリの英語が、いつの間にか流れるような美しい発音になっていた。発音の癖というものはちょっとやそつとで直るものではない。現に私やイーサンが死ぬほど苦労したのに、どうしてメアリは数分で正

しい発音を操れるのか。

「ね、そのことについても謝りたいのよ、クロスさん」

メアリは自転車の荷台で、ちょこんと小さくなった。

「本当はね、アルファベットも全部覚えてたし、英語もきちんと喋れるようになってたのよ。でも私分らない振りして、わざと我儘言つて困らせたの。クロスさんやカーターさんに構つてほしくて。本当にごめんなさい。私、ちゃんとカーターさんにも謝るわ」

「いや、そんな、いいんだ」

気づけば荷台のメア리를きつく抱きしめていた。この子の髪が、体の線が身に染みた。

「いいんだよ、メアリ！ 私もイーサンも怒つてやしない！ みんなちゃんと分かつてたよ。今はただ、お前が私の名前を口にしてくれたことが嬉しいだけなんだ！メアリ、誰もお前を嫌つていない。みんなお前が大好きなんだよ！」

「私、明日からみんなと仲良くなれるわよ

ね？」

「当り前じゃないか！ もうお前は私達の家族なんだから！」

家族という言葉が舌に新しい気がした。愛した女性が残したものを、今家族と呼べたのだ、と思うと、とてつもない喜びが私を満たした。

「クロスさん。これから私を何て名前で呼ぶの？」

再び走り出した自転車に揺られ、メアリがふと私に問いかけた。

「何を聞くの。お前にはお母さんから授かつた素敵な名前があるじゃないか」

「そりゃ、メアリつて名前も気に入ってるわ。でもよ、クロスさん。これからクロスさんの家族になるなら、その証に何か新しい名前が欲しいのよ。新しい家人達に呼ばれる特別な名前」

この時、頭に浮かんだのはアンと、歴史の教科書だった。

メアリー・クリステイーン。アンの付けた名前。そしてオーストリアの王女と同じ名前。一族の中でもっとも愛され、幸せな



結婚をしたその王女は、最愛の母親にこう呼ばれていた。

ミミ。

「ミミ」

と、私は振り向いた。

「ミミはどう？」

「ミミ」

彼女は唇に乗せて繰り返した。楽しそうな声色だった。彼女の声を介すと、何の欠点もない言葉に聞こえた。

「うん！ 私、ミミがいいわ！」

その一言で彼女はミミになった。誰もが名前を知るミミは私が生んだ。紛れもなく私の子だった。

宣言通り、ミミは朝食の席でイーサンに謝った。

「ごめんなさい、カーターさん。私ね、構ってほしくて我儘言っただけと困らせてたの。今日からきちんと行儀よく勉強するわ」

「はてね……」

イーサンはどこか芝居めいた仕草で肩を竦めた。

「俺は困ったこと何かありませんでしたけど。ね。どんなにお前が我儘だって聞かんぼうだって、俺は困ったりはしませんよ」

ミミは嬉しそうにイーサンに飛びついた。そしてテーブルに着くと、なんともお行儀よくかぼちゃのパンケーキをナイフで切り分けながら食べた。

「メアリ」が「ミミ」に変化したのは、私の気づかない内だった。私もミミも、別にこう呼べと命じたわけではないが、イーサンはいつの間にか彼女をミミと呼んでいた。女中や部下達も、さすがに呼び名はお嬢様だったが、それでもそのお嬢様の前にミミが付くという事は、すっかり心得ていた。

ミミはイーサンに宣言した通り、真面目に勉強を始めた。なるほど、嘘をついていたというのは本当らしく、すでに彼女はアルファベットも足し算も完璧に心得てい

た。ならば次のステップに進むのがよからう、と私は二桁の足し算引き算やら、もう少し難しい文章の読解なんぞやらせてみたが、そこでようやく違和感があった。

ミミの習得が異常に早すぎる。大体、勉強ができない振りをしていた、というのもたった一週間がそこらだ。その間に彼女は、足し算もアルファベットも全て心得ていた。つい先日まで文字も読めなかった子にしては、習得のスピードが異常だ。新しい勉強だって、足し算引き算はたった三十分で、もう何桁でもこなせるようになり、シンドレラの絵本も十分ならずと読み終えてしまうのだ。

「天才児というやつでしょうか」

子育てのベテランであるジェフェリーはそう言った。

「稀にそういう子が生まれるそうなのですよ。幼い頃から高い知能を持った子供がね。お嬢様はその部類なのでしょう」

「すごい！ 俺の妹は天才なんだね！」

「そんな呑気な事言ってる場合か」

と、私は能天気なイーサンを睨んだ。

「あのね、もしミミが成長して、まだ十五歳にもならない内に俺達の知能を追い越したらどうするつもりなんだ？ 誰があなたの子に勉強を教える？」

「そんなら、今のうちにあの子を私立校に入れるとか？」

「いえ、それはお薦めしません」

と、ジェフリーがイーサンを制した。「集団学習は全員の学習進度を揃えるものです。習得が人より早いお嬢様には向きません」

「でも、私は凡人だ。凡人は天才を教えられない。だとしたら、学校にやって教育のプロに任せるしかないだろう？」

「いいえ、旦那様。その教育のプロを雇ったらいいでしょ」

「ああ」  
私は合点がたって、手をポンと一打ちした。

「家庭教師か」

「ミミ、お前先生が欲しくないかい？」

と、夕食の席で、私はカレーライスを頼張るミミに聞いた。

「先生？」

「そうだよ。もっと難しい勉強を教えてください、お前だけの先生」

「クロスさんが先生じゃいけないの？」

「私はお前ほど頭がよくないし、勉強も忘れかけてるところが多いからね。プロに任せた方が、お前にとってもいいだろう、と思ったの。このカレー、ちょっと辛い？」

「そんなことないわ」

ミミは水をゴクゴク飲んで答えた。

「そんなことないのよ、クロスさん。でもクロスさんが必要だっていうなら、先生に教えてもらってもいいわ。女の先生にしてちょうだいね」

「そりゃいいや。勉強だけじゃなくて、ピアノやダンスも教わらなきゃいけないしね。ロバート、このカレー辛いよ」

イーサンが唇を赤くして言うのを、私は肩を竦めてやり過ごした。

「明日はりんごと蜂蜜を入れておくよ」

「待って、明日もカレーなの？」

ミミの驚きの声は無視した。

家庭教師探しは難儀した。募集の広報をあちこちに出したが、戦時中とは大違いで一人の候補者も現れなかった。

「現実考えてくださいよ。語学も数学も大卒並みにできて、音楽もダンスも教えられる女なんて普通いますか」

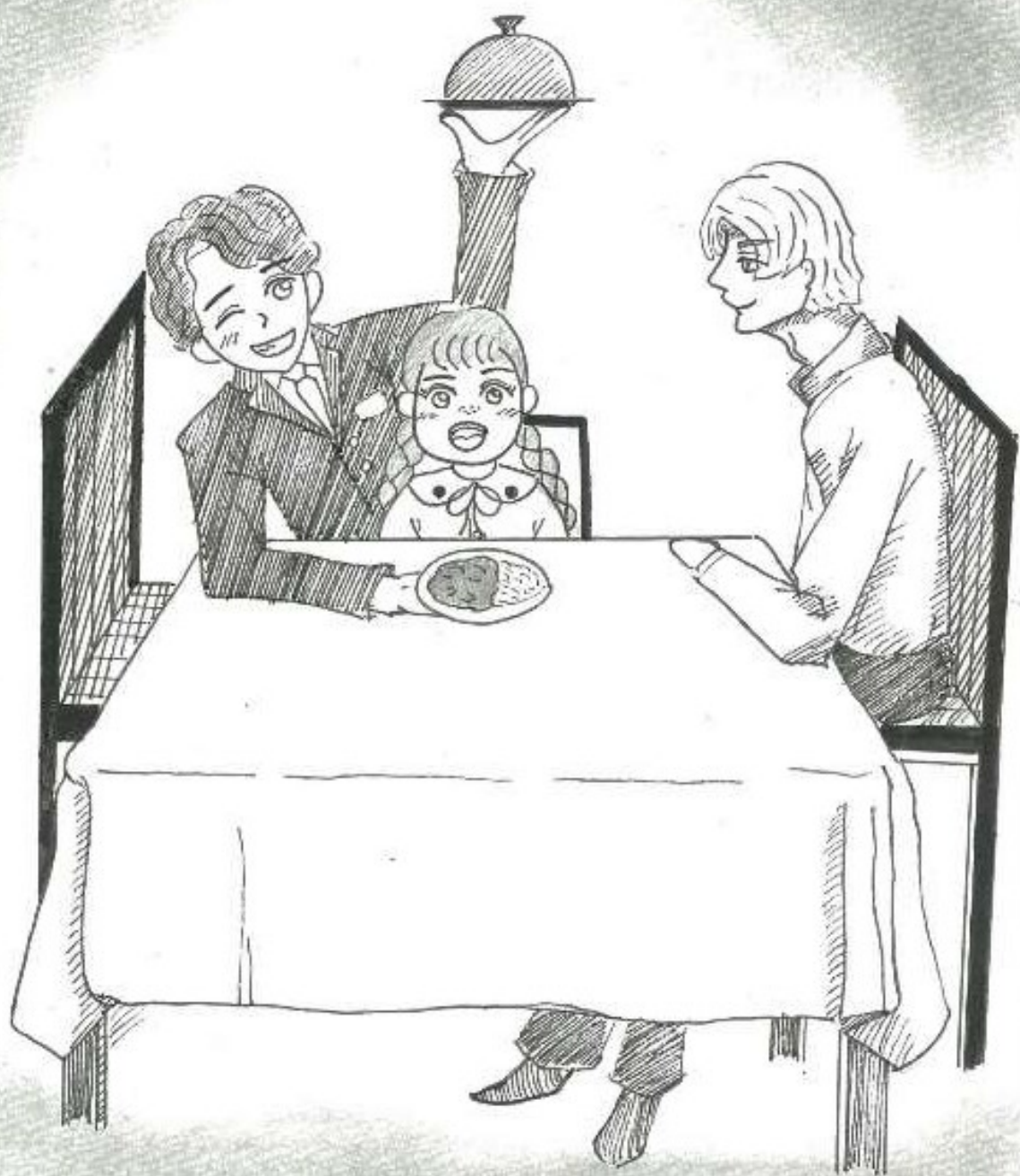
そういらんことを言うマツテオを尻目に、私は必至こいてミミに掛け算を教えた。

「だからねえ！ 二の段で八を作るには二四が八って覚えればいいの！ わざわざ二を三倍せんでもいいの！ 余計な式を作っちゃ面倒だろう！」

「だから、それがどうしてだめなのよ？ 答えが同じになれば、式は何だっていいんでしょ？」

「知らんがな、そんなことー！」  
というミミの質問責めにもぐったり疲れ切って一か月、とうとう天使の便りが舞い込んだ。

「リーズ・ドーキンス、二十一歳。就職希



望、か。家庭教師になるには若いな」

私はエントリーシートを読み上げた。この上なく嬉々として。

「何々、シカゴ大学社会科学部卒。飛び級か、すごいな。十六で大学入りとなると、大層な良家の令嬢なんだろうね。きつとピアノもダンスも心得ているはず」

私は次に、エントリーシートの証明写真へと目を移した。そして凍り付いた。

美しい女性だった。白黒写真では髪の色も目の色も灰色だが、私はその元の色を全っていた。長い髪は短く切り揃えられ、令嬢らしいふっくらとしていた頬は痩せていたが、私は彼女の正体がすぐに分かっていた。

リーズ・ドーキンス。本名はグレース・マクファアレン。

「旦那様」

と、背後から昌義が不安気な声で話しかけてきた。

「一応確認のためにシカゴ大学に問い合わせをしたんです。そしたら、リーズ・ドーキンスという学生が在籍していたとい

う事実はない、という答えでして……」

「そうだろうな」

私は何も知らない昌義に呟いた。

彼女がどうしてエントリーシートを送ってきたのか、私には分かった。どんな思いで写真を撮り、どんな思いで一筆一筆書類を書いたのかも。彼女は私に復讐をしに来たのだ。婚約者を奪い、誇りも夢も踏みにじった私に一太刀報いるべく、少しでもヴァルナ社に近づこうとチャンスを狙い、他にライバルが少ないだろう家庭教師の職に飛びついたのだ。

しかし、と私は憐れな笑みを浮かべた。

こんな嘘で私を騙せると思ったのだろうか。変えたのはどうやら名前と住所と髪型だけであるらしい。きつと「グレース・マクファアレン」という女は在籍していたか」とシカゴ大に問えば、「イエス」と返ってくるだろう。

学歴や経歴に、彼女は嘘を吐けなかった。薄っぺらい嘘だけで私に立ち向かったのだ。いくら名前を変えても、髪を切っても、リーズ・ドーキンスはグレース・マクファ

アレンをやめられない。全てを真心のままに、嘘をつかず正直に生きて来たグレースでしかないのだ。

採用するべきだろうか、と私は顎をしきりに触った。家庭教師としてはこの上ない人材である。だが彼女は私を殺したいほど憎んでいる。採用すればきつと殺される。だが、私を押さえつけてナイフを振り下ろすグレースも、飲み物に毒を仕込むグレースも、妙に空虚に映った。彼女は決闘で死ぬ女だ。殺すよりも相打ちを望むだろう。ならば、殺すときは私に宣言するはずだ。そうなれば、きつと私はこう言える。「ミミが一人立ちするまで待ってくれ」これを聞けば、彼女はきつと剣を収める。約束の時間まで。

まずは会ってみよう、と私は決めた。彼女なら私と会うやいきなり抜刀することはあるまい。ならば会うべきだ。このままこそそそ逃げ回っていれば、私はまたアレックやエベレットを殺すだろう。

「ミス・ドーキンスに電話」

「はい。ご用件は？」

「面接をするから明日の十五時に来るよ  
うに、と」

二年ぶりに、私はグレースに会った。小  
部屋に二人きりだった。護衛はおらず、二  
人を隔てるものは紅茶のカップだけだっ  
た。

彼女は書類の通りだった。短い髪。痩せ  
た青い頬。そして怒りに燃える真っ直ぐな  
瞳。冷静を取り繕いながらも嘘の付けない  
正直さ。

「ミス・リーズ・ドーキンス。お会いでき  
て嬉しく思います。ロバート・クロスです」  
「初めまして」

グレースは少し頭を下げた。  
「履歴書を拝見させていただきました。社  
会科学部卒だったそうですね。数学や歴史  
はお得意で？」

「人に教えられる自信がなければ志愿い  
たしませんわ」

「変わった生徒です。特殊な質問をされる  
こともありますわ」

「構いませんわ」

「生徒は女の子です。ダンスや音楽の手ほ  
どきはおできになりますか？」

「心得ております」

私は一つ一つ確認欄に印を書きながら  
質問を続けた。そして最後にあることを聞  
いた。

「ではミス・ドーキンス。最後に聞かせて  
ください。教えることは好きですか？」

グレースの顔が少し上に向けた。荒々し  
い目が昔のものになっていた。

「あ……え……」

と、狼狽しているらしいたどたどしい声  
が途切れ途切れに聞こえた。

「ミス・ドーキンス。あなたの心をそのま  
ま伝えていただければよろしいのですよ」

「私の心ですか」

グレースの答えはたどたどしかった。忘  
れかけていた昔の記憶を、言葉に乗せて少  
ずつ引き出しているようだった。

「そういえば、昔は誰かを教える仕事がし  
たいと思っていたんです。ただ勉強だけで  
なくて、未来への希望とか、夢を現実にす

る努力とか、女の子の自立とか、そんな人  
生に影響する色んなことを教えたいって。

ああ、私思い出しましたわ。忘れてたと思  
っていたけれど、本当は覚えていたんだわ」

グレースは笑った。グレースの中で、一  
番好きだった顔だ。

「私、やりたいと思ったから志愿したんで  
すわ。教えたいからここに来たんだわ」

「ミス・ドーキンス」

私は彼女のバラ色の手を取った。

「生徒に会ってください」

ミミとグレースは、初対面でも臆するこ  
となく楽しく話していた。

「その年でサン・テグジュペリが読めるな  
なんてすごいわ。先生も小さい頃よく読んだ  
ものよ」

「でもね、先生。クロスさんもカーターさ  
んもちつとも本を読まないのよ。そのせいで  
誰も私のお話が分からないのよ」

「まあ、それは寂しいわね。でもこれから  
は先生と好きなお話できるわよ」

二人の談笑を、私とイーサンは廊下で除いていた。

「あれはグレースでしょ？」

イーサンも彼女の正体に気づいていた。

「でもこれからは違うよ。彼女はリーズ・ドーキンスだ」

「リーズと呼んだ方がいいんだね」

イーサンはそう言った。

「それが彼女のためになるなら、そうするよ」

リーズはやはり、教師としては文句なしの逸材だった。今まで「あんたらの教える勉強は退屈で、暇で暇でしょうがない」と生意気ほざいていたミミは、一気に忙しくなった。

「今日の算数は分数の計算をマスターしますよ」

と、リーズは特別に逃えた教室の黒板の前で、自家製の教科書を広げて言った。そして一通り公式を説明した後、すぐに問題集を解かせ、できたら素早く採点し、間違

えたところを解説する。そして次はさらに難解な計算のやり方を教えるのだ。

「少しスピードが速すぎやしませんか？」

と、授業を見学していた私は物申したが、リーズはてんでけろりとして言った。

「そんなことございませぬ。あの子は天才児ですから、あのくらい速くなきゃ飽きてしまいますわ」

こんな様子は、ピアノやヴァイオリン、ダンスの授業でも同じだった。

授業も私の仕事も終わり、リーズが帰宅すると、夕食の席でミミは習ったばかりのことを得意げに解説した。

「リーズ先生はすごいのよ！ 算数も本も何でも分かるし、ダンスもピアノも上手なのよ！」

「お前もあんなレディになれるといいね」

イーサンはにこにこ、かぼちゃとひき肉のパイをつつきながら言った。

「それにあの人は美人だし」

「カーターさんだったら、女の人を顔で見ちゃだめよ」

「まあ、いいじゃないか。だって綺麗な

だもの」

リーズが教師の職に就いてから、私の人生で最も幸せだった日々がようやく始まった。あの日々の中、誰もが満ち足りていた。終戦後の暗い影が取り払われ、欲望の象徴だったヴァルナの塔は、家庭となった。

ミミは頭も体もめきめきと成長した。初めて会った時はあばらも浮き出るくらいやせ細っていたのに、今ではすっかりふっくら太った。

「太ったなんて最悪よ。私はクロスさんみたいに、ほっそりすらつとなりたいのよ」丸くなった頬をつねって、「お前すっかりふくふく太ったね」と揶揄うと、ミミは不満たらたらで言った。

「太ることはいいことだよ。元気な証じゃないか」

「嫌よ。デブの女の子なんてみっともないわ」

「じゃあ、明日からはお前のおやつはなしでいい？ スカダーさんからまたオレン

ジが届いたから、マーメレードでも煮よう  
と思ったんだけど」

意地悪く言うと、ミミは少数の計算をする  
時よりも難しがつて唸るのだった。

勉強はリーズに任せてしまったが、私に  
はまだ教えることが残っていた。授業のな  
い休日、私はミミに料理や洗濯、掃除の仕  
方を教えるのだった。メイド任せにせず、  
自分の部屋は自分で掃除し、自分の洗濯物  
は自分で畳むように言うと、ミミは大人し  
く掃除機をかけながらブツブツ言った。

「クロスさん、私はお金持ちのお嬢様よ。  
お嬢様って言うのはたくさんのメイドさ  
んにかしずかれて、何でもやってもらうの  
が本当じゃないかしら？」

「おや、それは成長の妨げってものですね」  
と、私はハタキを。パタパタしながら言い  
返す。

「だってお前がずっとお嬢様のままでい  
るかどうかわからないだろう。もしかした  
ら、イギリスの王子様と結婚するかもしれ  
ない。そんな時はリーズ先生の教えが役に  
立つ。だけど、ただの普通の青年を好きに

なって結婚するかもしれない。そんな時は  
私の教えが役に立つってもんさ」

「私が誰と結婚してもいいように、ね」  
ミミはテキパキ掃除機を動かしながら  
笑った。

「ところがどっこい、私はお嫁になんか行  
かないわよ。私はね、クロスさん、お仕事  
してお金持ちになりたいの」

ミミは勉強だけでなく、家事もテキパキ  
こなした。さすがにいきなり上達したわけ  
ではなかったが、朝食ぐらいいは何とか作  
ることができた。そんな様子を見ると、彼女  
には無限の進路が広がっているように思  
えた。マリー・キュリーのような偉大な学  
者にも、育ちのいいお嬢様にも、できのい  
い主婦にも、何にだってなれるような気が  
していた。体を売るしか道がなかった私と  
はまるで違っていた。

何よりもミミのことを溺愛したのは、間  
違いなくイーサンだった。彼はいつもミミ  
にくつついていた。何よりもミミを気にか

け、荒々しい風が彼女に当たることすら許  
さず、事あるごとに体調を尋ねた。勉強の

合間に運動を教え、縄跳びや徒競走、バス  
ケットボールを楽しんだ。ピルの五階に空  
中庭園のように造られた中庭に、私はバス  
ケットゴールを取り付けた。ミミはイーサ  
ンお手製の白いレース生地の手操着を着  
て、これまた器用にボールをドリブルし、

軽々とハードルを飛び越え、くるりと地面  
の上を回転した。イーサンも久々に太陽の  
下で体を動かすのが楽しいのか、薔薇色の  
肉体をＴシャツ一枚に包み、元気に足を開  
いて大地を駆けまわった。

雨で運動ができない日は、イーサンはミ  
ミに裁縫を教えた。ミミは俯いて、時には  
指を針で突きながらもハンカチを一枚仕  
上げた。何でもござれのミミも、さすがに  
裁縫ではイーサンに勝てないらしく、それ  
に本人は不満であるようだった。しかし、  
余興ついでに教えた鍵開けはイーサンを  
上回って、それで裁縫の埋め合わせになっ  
た。

疲れ切った二人は私の夕食を大いに食

べた。今まで食事が出されても、三口しか口にしないかつてのイーサンが嘘のようだった。食べた後、二人は抱き合って、一つのベッドで眠るのだった。残業終わりに寝室を除くと、二人は暗がりの中、頬をバラ色に染めて、まるで天使のように眠っているのだった。唇には微笑が浮かび、ミミはイーサンの腕の中にすっぽり収まって、まるで堅固な城壁に守られているように安心しきって眠り、イーサンは潰れてしまいうような宝石を抱えるように優しく、ミミを抱きしめていた。私はその様子を、寝台の縁に腰掛けて見つめていた。いつまでも、何時間でも。

リーズはグレースの怒りの断片を見せることはなかった。昔のつらい過去も、私への怒りも全てなかったかのよう、美しく心優しい教師でいた。熱心に教え、できが良ければ盛大に褒めた。最早何のために自分がここに来たのかも忘れていたようだった。

ミミは当然先生を好きになった。彼女を女性としても尊敬しており、彼女のように美しく品のある女性になりたい、と思ってるように、別に何の格式張る必要のない夕食の席でもミミはスープを少しずつと飲んだ。私とイーサンがスープなり焼肉なりに、昌義から勧めてもらったトウガラシの粉をぶっかけて味を変えてしまうのを、「リーズ先生のような淑女ならそんな行儀悪いことはしない」と叱るし、風呂上りの素っ裸の上に薄い着物一枚でごろごろしている、「リーズ先生は誰も見ていないところでもきちんとコルセットを締めるわ」と叱るのだった。ミミとリーズは休み時間でもファッションの話をするように、ある夜「ヘアアイロンを買ってほしい」とおねだりしてきた。

「またなんでそんなものが欲しいの」  
あと、聞くと

「だって私、カーターさんみたいなふわふわの巻き毛になりたいの。だって髪が真っ直ぐだと地味に見えるじゃない。で、どうしたら巻き毛を作るかって聞いたら、リーズ先生はアイロンを使ってるんですけどよ。ねえ、買ってよお。私ちゃんと上手に使いますから」

「いけません！ 子供がアイロンなんか使ったらどうするの！ それに髪が真っ直ぐだっというじゃないか。私だってストレートヘアなんだから」  
「クロスさんはお顔が華やかだから真っ直ぐでも綺麗なんですよ！ 私は地味だから嫌だもん！」

と、ミミは久しぶりに我儘を言っただけで、女と少女が結びついたことで、今まで無頓着だったおしゃれに火が付いたように、全く女の子は恐ろしいと舌を巻いていると、そこへひよっこりイーサンが現れて助け舟を出した。

「巻き毛を作りたいんだったら三つ編みにしてごらん。ずっと三つ編みにしてると段々癖がついて、巻き毛になれるよ」

それを聞いたミミは嬉々として、毎朝髪を編むようになった。髪型の変化に気づいたリーズは、すぐに美しい色とりどりのリボンを彼女にプレゼントし、三つ編みをさ



らに華やかに仕立てた。そしてミミは夜寝る前に髪を解き、イーサンのようにふわふわとした巻き毛が出来上がっているのをうっとり眺めるのだった。

髪型を始めすっかり女らしくなったミミが、何よりも楽しみにしているのが、金曜日のダンスの授業だった。バスケやサッカーが得意なミミは、無論ダンスも上手かった。自分の技量が最大限引き出せるダンスの授業を彼女は心待ちにし、金曜はミミの装いが最も華やかになるのだった。

この授業には意外なことにイーサンも加わっていた。ダンスの見本を見せるために、リーズは最初にまず一曲踊って見せるが、その相手役が必要だったのだ。誰か上手い踊り手はいないか、と相談されたのだが、まず私は話にならないほど下手くそだし、他の従業員ではワルツを習得できるほどの地位にあったものはいない。ミリーは独学で身に付けていたが、男性役はできない。そこで白羽の矢が当たったのが、イーサンだった。あまり彼は社交場に出ないせいで踊る機会は少なかったが、運動神経が

いいせいか実力はかなりのものだったのだ。

イーサンは喜んで引き受けた。そしてミミとリーズと順々に踊った。私はヤツがご優雅に踊っている様を見てみたくて、面白半分で稽古を覗いた。そこで目を見張ったのだ。

ミミと踊るとき、イーサンは腰を曲げて何とも愉快そうにくるくる彼女をリードしていた。しかし、リーズと踊るときはまるで雰囲気違っていた。二人はまるで笑わず、かといって張り詰めた空気はなく、いたって真剣に見つめあって踊っているのだった。イーサンの手は力強くリーズの腰を抱き、リーズは頬を薔薇色に染めてイーサンの灰色の瞳を見つめていた。その様子は、男女が内に秘めた愛を、一欠けらの恥ずかしさを残しつつも真剣に打ち明けあっているようだった。

二人は想い合っているのだろうか。そう私は思わずにはいられなかった。いつか初めて会った時、イーサンはグレースを前から知っているようだった。私の知ら

ないところで二人はもう知り合っていたのだろう。婚約者がいた頃から、グレースはイーサンに惚れていたわけではないだろうが、さてイーサンはどうだったのか。エベレットが死に、グレースは新しくリーズとなり、イーサンはそこでぼんやりしていた彼女への想いはつきり自覚したのだろうか。またリーズも気持ちが新しくなって、自分を想うこの少年に向き合っているのだろうか。

結局結論は出せずに終わった。かと言って、イーサンやリーズにこのことを聞いただす気も起きなかった。私はただ嬉しかったのだ。惚れあっていようといなからうと、イーサンにとってリーズは大切に想う相手なのだろう。そしてリーズも、イーサンに優しい思いで接しているのは間違いないだろう。それで十分なのだ。私はリーズに幸福であってほしかった。新たな居場所をやり、新たに想う相手をやり、また恋のときめきや家庭への希望を持たせることが、私の彼女への罪滅ぼしだったのだ。

「あなたが来てくれて、本当に良かった」

と、私はリーズに言った。大雨で車が出せず、リーズがヴァルナ社に一泊することになった、夕食終わりのことだった。

「ミミもイーサンも、あなたがいてくれるおかげで本当に幸せそうだ」

私は、先生がお泊りしてくれることに大喜びでボードゲームを取りに出て行ったミミや、どこか緊張しているかのようなイーサンを思いながら言った。

「そう言っていただけで嬉しいですわ」

リーズは一言言った。私と二人だけの書齋に、まだ伸び切っていない声が固く響いた。リーズの目には、戸惑いときこちなさが現れていた。私と二人で話す時は、いつもこうだった。いつも彼女は戸惑っていた。

「今夜は寛いでくださいね。ここを我が家のように思っていた方がいいのですよ」

リーズは一つ頷いた。そして、誰もいない夜道に、ふと寂しさを漏らしてしまったかのような声で言った。

「あなたがこんな方だとは思いませんでしたわ」

私は答えた。どこか悲しかった。

「いつもそう言われるのですよ、私は」

「今のあなたは随分違っていますわ。どうしよう、困るわ。本当に困る。あなたをまともに見つめることもできないわ」

今度は笑ってしまった。一体何が違うというのか。

「私は夜会で気の利いた事一つ言えなかったのですよ。ダンスもまともに踊れないのですよ。テーブルマナーだって、本当に何も分からなかったのですよ」

そこへミミがモノポリーのセットを持って賑やかに走りこんできた。リーズはにこやかにミミに答え、二人はゲームに興じた。その夜はそれでお終いになった。

あんな幸福は、家族が大勢いて、お金の心配も誰かを失くす心配もなく、悔しさも惨めさも感じず、何も代償にしない幸福は初めてだった。ミミは元気で、イーサン

は影を誤魔化すような笑い方をしなくなつて、リーズは家庭教師の枠を超えて家族同然になっていた。十分すぎる、身に余る

幸福だった。でもこういう幸福は、得ようと思えばいつでも得られたのだ。

ミミは色んな人と知り合った。神様の話をしてもらうために、私はミミをバトリックの教会に連れて行った。

「あの頃の君が、今ではすっかり立派なお嬢様になったね」

と、彼は目を細めて言い、聖書の教えを説いた。ミミは大人しく聞いた。そして「聖書には素敵な話がたくさんあって、案外おもしろいわ」と言った。てっきり退屈するか、と思っていた私はいささか驚かされた。

ヴァレリアとヴァイオレットとも、ミミは仲良くなった。さすがにミミを娯館に連れて行った訳ではなく、二人が新年の挨拶にうちを訪れた際にぼったりミミが居合わせたのだ。

「ミミ。この人たちは私とイーサンのお友達なんだ。挨拶しなさい」

ミミは大人しく「初めまして」と挨拶した。しかし、リーズ以外でこんなに美人な女性を見るのは初めてなのか、すぐに目を輝かせて話し込み始めた。女三人の華やか

な会話に私はすっかり蚊帳の外だったのが、ミミがおやつに呼ばれて出て行ったのを見計らって頭を下げた。

「すまない。この所ずっと君達の所へ行けていなくて」

ミミが来てから、私とイーサンはほぼ全く鹿の園を訪れていなかった。さすがに何かと金銭の援助はしていたが、相手の顔たる私とイーサンが顔を見せないのは、彼らの沽券に関わるだろう、と思っただけだ。「最初はどうしたのか、と思っただけで、今日ですっかり分かりました」

と、ヴァイオレットは呑気に答えた。

「なるほど、あんな可愛い養女さんがいたんじゃ、私達なんてすっかり霞んでしまいますからね」

「私達、別に気にしてません事よ、ミスター・クロス」

ヴァレリアが涼しく言った。嫌味っぽくは聞こえなかった。

「お客は他にもおりますから別に困ることはないのに毎月大きなお金をいただいでい

るんですから、それだけで全く身に余る思いですわ」

「ヴァレリア。二十歳にもならないのに、本当にできた方だ。でも心苦しいことに、イーサンの方は、もう一度君の所へ通う確率は低いんだ」

「ああ、どなたか好きな女性でもできたのかしら」

ヴァレリアは十八とは思えない落ち着いたきぶりで、けろりとそう言った。

「ミスター・クロス。彼には非常に良くしていただきましたし、私も好ましく思っていました。ですが、まあ、私生活にまで踏み込める程ではありませんわ。イーサンに好きな方がいるなら、どうぞその方とお幸せに。私は何てだったって仕事ですもの」

「いや、全く頭が上がらないな、あなた方には」

「そんなことより、もう一度ミミちゃんとお話してできないの？ あんたの話には飽きたわ」

ヴァイオレットが退屈そうに言い退けると、そこへタイミングよくミミが紅茶の

セットの乗った盆をよっこらよっこらと持ってきた。

「あらあら、一人で運べて偉いこと！」

口々に女達が褒める中、ミミは手早くお茶の道具を机に広げた。

「お客様にお茶もお出ししないなんて、クロスさんいけないわよ。これ、バラの香りなの。召し上がってください」

再び私そっちのけで三人は話し始めた。高級娼婦ともなれば教養はさすがのもの、ミミは退屈する様子もなかった。

二人が帰った後、ミミは私に言った。

「あの方達、すごく綺麗でおまけにお話しがとつても面白いわ。リーズ先生にも負けないくらい。また来てくれるかしら」

「お前が会いたいなら、またお茶にでも呼ぶことにしようか。次はお前が作ったお菓子でもお出ししよう」

つくづく、この子はみんなに好かれる子だな、と私は思った。みんなに愛されるんだな、みんなお前を好きになってしまうんだな、と。

一方で、会社の方は売り上げが下落して

いた。しかし別段悲観することでもなく、戦時中儲かりすぎていたのが、普通のレベルに戻っただけだった。私は貿易もちまちまと行っていたが、鉄は武器ではなく、壊れた建物を直すのに使われた。麻葉を売ることも、武器を売ることもなかった。ただ鉄だけの、莫大に儲けることはないが安全な商売だった。二十歳だった頃の私は、急な戦争に追い立てられて焦っていただけなのかもしれない。リズリー氏は間違いではなかったのだ、と気づかされた。

目に余るほど高額な給与を得られなくなった。誰も文句を言わなかった。ジェフリーですら、「莫大な収入よりも安定した収入が大切です」と言っていた。彼らは利益を追い求めるギラギラとした輝きよりも、どこかもう満足の行き届いた安らいだ雰囲気を持っていた。

ミミの誕生日は毎年盛大に祝われた。朝から昼まで、ミミはたくさんの従業員やメイドからお祝いの言葉と細やかな贈り物

をもらった。それがどんなに小さな物でも、ミミは喜んで受け取っていた。

日が落ちて夕方になると、ミミは私とイーサンと食卓に並び、そこで三人だけでお祝いをするのだった。この食卓には時々リズが交わることもあった。

普段は「好き嫌いをするな」と叱る私も、この日ばかりはミミの好きなものばかり作った。何分子供の好物ばかりなので、食卓はいつもよりも華やかになった。鮭の燻製入りのサラダや、ローストビーフ、切り口の鮮やかなサンドイッチを楽しんだ後は、スカダー氏のオレンジと共に焼き上げたチョコレートのケーキとアイスクリームが出て、そのあたりからミミはプレゼントの予感にうずうずし始める。ところが私とイーサンは意地悪くわざとミミの期待の視線を無視して、手早く食卓を片付ける。そうして引っ張って引っ張って焦らしきったところで、やっとミミを手招きするのだった。

プレゼントは毎年、小さいながらも高価なものをやった。手作りの可愛い貝殻のプ

レスレット、フクロウの尾羽のように茶色い羽ペン、コバルトブルーの中に金の粒子が浮いている、ラピスラズリ色のインクが入ったガラス壺。そういったプレゼントを、ミミは綺麗なキャンデイの包み紙や、リズにももらったリボンや、初めて自分で縫ったレースのハンカチと一緒にクツキーの缶の中に入れて大切にしまった。そして贈り物のお礼を、キスと共に私達に言う。「お誕生日おめでとう」

私はベッドの中でミミにささやいた。隣ではミミとイーサンが一塊で眠っていた。その枕元には、昌義からもらった縮緬の人形、マツテオからの高いチョコレート、リズからのマニキュア、ナヒマナからの木彫りの熊が、ランプの光にきらめいていた。こうして後何度誕生日が祝えるだろう、と私は幸福な眠気に包まれながらぼんやりと思った。彼女が嫁に出て行くか、独り立ちして出て行くか、いずれにせよ自分の手を離れる時は、気が遠くなるほど先であるように思えた。それが嬉しかった。

五歳になり、六歳になり、七歳になった日、私はミミを自室に呼んだ。

「なあに、まだプレゼントがあるの？」

と、ミミはうきうき顔で言った。

「まあ、そうだね」

と、私は真面目な顔をして机の引き出しを開けた。そして中から一枚の紙ぎれを取り出した。

「それは……」

ミミがはつとして目を瞬かせた。机の上に乗っているのは、茶色く変色し、くしゃくしゃになった古いチョコレート紙の包み紙。十七歳の私がアンにプレゼントし、死の間際に返ってきたものだった。

「それ、ママが持っていたのだから！」

ミミは興奮したように叫んだ。

「そうよ、ママはいつもそれを本の中に挟んで持っていたのよ！ いつか言っていたわ。昔、とっても綺麗な男の子からもらった物なんだって！ 王子様からの贈り物みたいに大事にしているんだって！」

「そう、アンはそんなことを……」

私はミミを手招くと、その手に包み紙を乗せた。日に当たらない肌から、よく焼けた健康的な肌に渡ったそれは、一層輝いて見えた。

「お前にあげる。持っていてくれるね」

ミミはしばらく困ったように俯いていた。そして上目遣いに私を見た。

「ねえ、ママが言っていた綺麗な男の子ってクロスさんのことでしょ？」

私は何も答えなかった。だからミミは余計に不安がって、おずおずと包み紙を私の方へ差し向けた。

「これ、大事なものでしょ？ クロスさんにとつてもママにとつても。二人の大事なもののなに私貰えないわ」

「私もアンも、お前に貰ってほしいよ」

私はミミの手をゆっくり押し戻した。

「これは確かに、私とアンにとつても大事なものだ。でも、このまま私が持ち続けられ、これはいつか過去のものになってしまふ。だからミミ、お前に持っていてほしいんだ。お前は私と違って未来。これからもっと長く生きて、色んな夢を見て、色んな

時代を見るんだ。お前が行く未来に、私とアンを繋いでほしい」

ミミはようやく納得したように頷いた。

「分かった。持っていくわ」

そして、不安を押し殺したような笑顔で言った。

「でも、未来に行くのはクロスさんやカーターさんもよ。みんなと一緒に行くのよ。私一人でなんか行かないわよ」

ミミに包み紙を渡してから、「未来」という言葉が執拗に私に絡みついていた。

ミミの花嫁姿を見たい。あの子が大人になるのを見たい。そう思ったことは何度もあった。しかしそれが簡単に「未来」と結びつくのは分からなかった。生きていかなければいけないものに、私のような者がたどり着けるのか。様々な人間を陥れ、欺き、傷つけ、自殺させ、あまつさえミミの兄に殺人を命じていた、そんな私が未来へたどり着けるのだろうか。

幸福な日々だった。何の不自由もなかつ

た。ただ笑っていられた。しかし、自分の背景にある、自ら生み出した暗い影は、必ず存在していた。そんな私が幸福に笑って未来へ向かっていけるのだろうか。人々の憎悪と怨念を踏みつけながら歩けるのだろうか。

未来への不安。そしてもう一つ不安があった。日々が幸福であるあまり、蓋をしていた不安が徐々に少しずつ流れ始めていた。

私は誠心誠意、ミミに向き合ってきた。はずだった。いつも真心のままに接し、本当の想いで「愛してる」と言ってきた。

だけど、ミミは知らない。私は彼女に伝えていない。

私が体を売っていたこと。先代社長を見殺しにしたこと。戦争を使って金儲けをしたこと。パトリック牧師の友達と、リーズ先生の婚約者を自殺に追い込んだこと。イーサンが、もう何十人も人を殺していること。

嘘つきは嫌われる。嘘つきは一人ぼっちになる。

十歳になった頃、ある日ミミが仕事部屋にやって来た。

「お外で遊んでもいい？」

と、彼女は言った。

「中庭の鍵はいつでも開いてるじゃないか。行っておいでよ」

「そうじゃないのよ、クロスさん」

ミミはいつになくもじもじして、上目を使った。

「中庭じゃなくてね、私、ここを出て街の子と遊びたいの」

「街に？」

私はタイプライターを打つ指を止めた。

「そうなのよ。思い返してみれば、私街の子と遊んだことないのよね。一緒に遊んだ子といえば、他のお金持ちのお嬢様とかばっかりじゃない。それにヴィシユ又街やシヴァ街だってお買い物くらいでしか行ったことないわ。だから私、ちゃんと街で友達を作りたいって思ったのよ」

「なるほどね」

ミミを一人で遊びに行かせるのは心配だったが、しかし子供が冒険心を起したの

なら、心援してやりたいという気持ちがあるって、私は首を縦に振った。

「いいよ、行ってきなさい。誰かに送らせようか？」

「いい。一人で行けるわ」

「あんまり遠くに行くんじゃないよ。それと五時までには帰ってきなさい。何かあったら、近くの家かお店で電話を貸してもらうんだよ」

ミミはうきうきと、私の注意も上の空で、少しのお小遣いと水筒を持って飛び出していった。

なんでもない事だった。会話の上手い女の子ならきつとすぐに友達をたくさん作って、あれして遊んだ、どれそれをおやつに食べた、などと夕食の席で息せき切って報告してくれるだろう。

そう呑気に思ってたタイプを叩き続けた。そこに取引相手からの電話を受け取ったジェフェリーが報告書を携えてやって来たため、私の意識はそちらにとんだ。

ミミの帰りは早かった。四時にもならない内だった。

彼女は息を切らしながら、私の私室へ駆け込んで来た。

「お帰りなさい。随分早かったね」

ミミは何も返さなかった。下を向いてぜいぜいと息を吐き、膝を抑えていた。「一体どうしたの」と私は彼女の前に屈みこんだが、そこではっと目を見開いた。木組みの床に、ミミの呼吸に合わせてぼたぼたと血が滴っていた。驚いて顔を上げさせると、額が切れ、そこから血があふれていた。

「一体何があったの!? どうしたの、この怪我は！」

「クロスさん……」

私が叫ぶ声とは反対に、ミミは掠れて消え入りそうな声で呟いた。

「一緒に遊ぼうって行つたのよ……。ヴィシユヌ街の子たちに……。そしたらね、あの子たち、人殺しの悪者会社の娘とは遊べないって石を投げたのよ」

身が凍り付き、息が詰まった。押し込めていた恐怖があふれ出し、震えが止まらな

くなった。そんな私を、騒ぎを聞きつけて飛んできたイーサンやその他の従業員の騒ぐ声が包んだ。

「あの子たち、こうも言ってたの。お前の所の社長は、いやらしいことしてお金をもらったり、人を騙したり、戦争で武器を売ったって。それに邪魔な人間をいっぱい殺したんだって。ねえ、嘘よね？ あの子たち、クロスさんがお金持ちなの妬んでデータラメ言ったのよね？ クロスさんはそんなことしないわよね？」

私は黙っていた。怯え戸惑うミミに、嘘でも「そんなことするわけない」と言わなければいけなかったのに、口が動かなかった。嘘を吐くには、私が今までしてきたことは重たすぎた。

「カーターさん！」

不安を募らせたミミは、イーサンに駆け寄って飛びついた。いつも自分を甘やかした、綺麗なものをたくさん作ってくれる最愛の兄の手に縋りつき、半狂乱になって叫んだ。

「カーターさんは人なんて殺してないわ

よね！いつものカーターさんよね！  
人殺しなんかじゃなくて、私の大好きな兄  
さんよね！」

イーサンも黙っていた。誰も何も言わな  
かった。ジェフェリーは歯を食いしばり、  
マツテオは俯き、昌義は震えだし、ナヒマ  
ナは顔を覆って泣き出した。しかし、喋る  
ということは誰もしなかった。ミミは恐怖  
でじりじりと後ずさった。いつも自分を撫  
でてくれる人たちが、微笑みかけてくれる  
人たちが、自分を愛してくれる人たちが、  
何か別のものになってしまったのを見つ  
めるように、恐怖で体を震わせた。

ミミは何か化け物でも見るように、私と  
イーサンを交互に見た。

「ねえ、やっぱり本当なの？ あの子たち  
が言ってた通りなの？」

相も変わらずみんな黙っていた。その沈  
黙で、ミミは全てを察したようだった。

「騙したのね」

ぼつりと一言呟いた。頭がさえわたるよ  
うな、鋭い一言だった。

「騙してたのね！まるで私にはいい人

みたいに振舞って、裏ではこんなひどいこ  
としてたのね！ どういうつもりなのよ、  
あんたら！ こんな悪い人たちがどうい  
うつもりで私に話しかけてたのよ！」

「ミミ……」

彼女の激怒に気圧されて、私はようやく  
掠れ声を出した。

「落ち着きなさい」

「命令しないでよ、この大ウソつき！」

ミミは半狂乱になって、自分に向かって  
差し出された手を引っぱたいて払いのけ  
た。

「触らないで！ 近寄るんじゃないわよ、  
汚らしい！ 今まで散々ひどいことを  
しておいて何が「愛してる」よ！ ずっと  
ずっと騙してたくせに！ 嘘しか言って  
こなかったくせに！ あんたなんか愛  
の何が分かるのよ！ あんたのせいで私  
は傷ついたのよ！」

頭から冷水を浴びせられたように、私の  
体の震えが止まった。唇をぼかんと開けて、  
目の前のミミを虚ろに見つめた。

「ママもあんたのせいで死んだのよ」

ミミの冷酷な声が頭から降り注いだ。氷  
のように冷たい水が、体に突き刺さるよう  
な痛みを全身に感じた。

「あんたが殺したのよ！ あんたなんか  
に会わなかったらママは生きてたのよ！  
あんたのせいでママは死んだ！ ママは  
お前が殺したんだ！」

ミミはそれ以上叫ばなかった。頬を思い  
きり引っぱたかれて、息が詰まってしまっ  
たのだ。ミミの左の頬はたちまち赤く鬱血  
した。

さっと全身の血の気が引き、一度は去っ  
た体の震えがまた戻ってきた。右の掌が異  
常に熱くジンジンと疼いた。瞳が下を向き、  
頬を抑えて床に倒れこんだミミを見つめ  
た。

殴ってしまった。

その事実がたちまち部屋中を駆け巡っ  
た。余りのことに誰も悲鳴すらあげなかつ  
た。

「やっぱりそうじゃない」

沈黙の中そう言ったのはミミだった。涙  
一つ流さない瞳には、半狂乱になっていた



先ほどとは違った色が浮かんでいた。何もかも悟り、理解し、絶望し、その果てに凍り付くほどの冷酷さと憎しみを宿した瞳だった。

「やっぱり騙してたじゃない」

ミミは部屋を駆け出て行った。この光景は何度も何度も夢に出て来た。

時間が立つてくると、私は自分のしたことを思い出して半狂乱になった。

なんてことをしてしまったんだろう。

そう心に叫んで、私はミミの部屋の扉を何度も叩いて叫んだ。

「ミミ！ さっきはごめんよ！ 私が馬鹿だった！ 痛い思いをさせてしまってますまない！ 全部謝るよ！ 謝るからここを開けて！」

謝りながら、後悔がとめどなく溢れて来た。

そうだ、何をムキになっていたんだ！ あんなの子供が興奮して口から出まかせを言ったに過ぎないじゃないか！ なの

に私は大人げなく暴力に訴えたりして！ 命よりも大切な子を傷つけたりして！

「ねえ、ミミ！ お願いだから出てきて！ 頼むから謝らせてくれよ！ お前に隠し事をしてたことも殴ったこともみんな謝るよ！ お願いだから顔を見せてよ！」

ミミは何も答えなかった。

「ならせめて顔の傷だけでも治させて！ すぐに医者を呼ぶから！ そのまま放っておいたら病気になるてしまうよ！」

「今更何も響かないわ。みんな嘘なんだから」

ようやく返ってきた答えは、相変わらず冷え切っていた。

「違う、嘘なんかじゃない！ 俺は嘘ばかりついてきたんじゃない！ 本当のことだってあったんだ！」

「消えろ」

その一言で、私は狂乱するのをやめた。その場でただ凍り付いた。

「消えろ。消えてしまえ」

ああ、終わった。なぜかその時思ったのはこれだった。終

わった。何もかも終わった。母やアレックやアンと死別した時よりも重い絶望が私を襲った。何もかもお終いだ。全ての道が、全ての希望が、全ての未来が、これで断たれた。未来へは行けなかった。

私はそつと扉から離れた。一步一步に、絶望が重みを増して押し掛かった。お終い。何もかもが終わり。暗い諦めが全身を覆っていた。それでもその暗さの中に、先ほどの狂乱がほんの少し残って、こう叫んでいた。

違う、嘘なんかじゃない。お前を愛していたのは、決して嘘なんかじゃない。俺は本当に、お前を愛していたんだ。

みんな私を恐れた。あの日からだった。軽口を平気で叩くマッテオも、口うるさいジェフェリーも、気の強いナヒマナも、みんな私に怯えるようになった。世間話一つしてくれることはなかった。

イーサンは喋らなくなった。何か問いかけても頷くだけだった。私に甘えていた日

が嘘のように、まるで主人の命令に従うだけの猟犬のように寡黙になった。指に刺し傷がなくなつて、カバーが外されたままだった新品のミシンは埃を被った。

リーズは本来の目的を取り戻した。彼女は相変わらずミミの家庭教師としてビルを訪れた。その過程で、何もかも悟つたのだろう。誰が教えたというわけではなく。

彼女は表立って態度を変えるようなことはせず、相変わらず品よく私に答えた。だがその背後に、激しい憎しみの炎の熱を感じる事ができた。しかしここに初めて来たときは違い、その憎しみにはエベレットを殺した恨みの他に、裏切られたという無念が加わっていた。

ミミの中で、私は消えた。彼女は自分の記憶を自分で書き換えてしまったようだった。私とイーサンとの楽しい思い出、誕生日プレゼント、三つ編み、チョコレートのお包み紙。そのすべてがなかったことにされた。ミミは自分を、物心つかぬうちに悪徳商人に引き取られ、愛に飢えたまま教育を植え付けられる憐れな少女にしてしま

った。だから再開した時、私を恐怖の目で見つめた。

ああ、どうぞこの人に怒られませぬように。今日もいい子でいられますように。

そう願っているのが分かった。

人々はミミの存在を忘れた。ヴァルナ社に女の子がいたことなんて、誰も彼も覚えてやしなかった。彼女に石を投げた子供達も、自分が何をしたのか覚えていないだろう。

私は何もかもを諦めた。ミミをもう一度説き伏せることも、もう一度活気を取り戻すことも、希望の活路を見出すことも。何もかも、もう無駄だった。あの一発の拳、いやそれよりもっと多くのこと、そんなものがミミを頑なな殻に閉じ込めた。イーサンの口をふさいだ。最早どうすることもできなかつた。

もう私はロバート・クロスではなくなつた。私はヴァルナ社の社長で、この街の頂点だった。誰にも愛されず、誰にも必要とされない、そんな孤高の存在だった。

ある日、私はジョゼフ・シャローブとい

う男に殺されかけた。車に乗っている途中、銃を彼の部下に発砲されたのだ。幸い弾は当たらず、銃の持ち主はイーサンに背後から撃たれて絶命した。遺体を調べると、身分証明書が見つかり、そこに勤め先が記載してあった。

「ジョゼフ・シャローブの一派か」

私は硬い声で呟いた。

「同じく鉄鋼を扱う会社の社長だ。戦時中から我がヴァルナ社のライバルだった。私に隙ができたのを見計らってこんな馬鹿げたことをしでかしたのだな」

背後を振り返ると、そこにはイーサン、昌義、マツテオがいた。

「始末してこい」

「あそこには」

その時、珍しくイーサンが呟いた。

「ヘンリー・シャローブという男の子がいる」

「始末してこい」

私はそれだけ繰り返した。

シャローブ暗殺の夜、私は無機質に仕事部屋で書類を眺めていた。時計の針は深夜の二時を指していた。夜十二時に出発した彼ら三人はまだ帰らなかった。

一時間が立って時計は深夜三時を指した。ようやく、静かに扉があいた。出血しているのか、返り血を浴びただけなのか分からないほど赤く染まったマツテオと昌義が立っていた。

「シャローブは死にました」

「そうか。息子のヘンリーもか？」

二人は何も答えなかった。

「イーサンはどうした」

血だらけの二人に、私は聞いた。

「もう帰ってこない」

昌義が唇を無機質に動かし、瞳には冷たい、どこか軽蔑の色が映っていた。

「あのガキはあんたの所には戻らない」

「そう」

驚く気力もなく、私は答えた。

「ご苦労だった。もう遅いから泊まってい

け」

「いい。帰る」

二人は音もなく出て行った。夜が明けるとまで、私は眠らなかった。あの二人もそうしたらどうだろう。

イーサンは明け方近く帰ってきた。あの二人と同じように血だらけだった。

「帰ってきたのか」

私は聞いた。イーサンが顔を上げると、そこには泣いて腫れあがった瞼があった。

「行くところないもの」

イーサンはベッドに腰を下ろして肩を震わせていた。笑っているのか、泣いているのか分からなかった。何か呟いていたが、何を言っているのか分からなかった。ただ彼がしきりに、

「ヘンリー。ヘンリー」

と、あの少年の名前を呼ぶのだけは聞こえた。

何日も、何週間も、何か月も、こんな風に生きていく。一日、一時間、一分、一秒。

何も思い出せなくなっていく。青春なんてものが俺にあったのか。俺は本当に初恋を味わったのか。俺を怯えた目で見るあの子供達を、本当に愛していたのか。分からなくなっていく。少しずつ少しずつ、大切にしていたものが薄くなっていく。「愛の何が分かるのよ」と叫ぶ声だけが頭に響く。こんな生活が後何年、後何か月、後何週間、後何日、何時間、何分、何秒。後どれだけこんな風に生きていくんだ。こんな風に。

もう限界だった。

死んでしまおう、とそう思った。

お湯がたつぷり張ったバスタブに、私は左手首を浸した。右手には鋭利な剃刀が握られていた。

剃刀の刃が深く左手首の血管を貫くと、鮮やかな血液が渦巻き模様を描きながら湯の表面に広がっていった。

やっとなる。

それだけ思えた。

長かった。貧民の苦しい生活、初恋、夢中で駆けあがった日々、友情、憧れ、戦争、別れ、出会い、幸福。三十年しか生きてこなかったのに、私が出会ったものはこんなにも多かった。でもその全てが崩れ去った。俺の生き方の何もかもが間違っていた。正しいことなんて何一つしてやこなかった。そうだ、ミミの言う通り、俺は嘘つきだった。だけど、もう本当のものをさえ分からなくなかった。何を欲しがっていたのか、何になりたかったのか、もう分からない。何が俺の真実なのか、本当の俺が何なのか。いや、全部嘘かもしれない。なら消えたい。いいだろう。こんな嘘だらけの俺なら、死んだって誰も悲しまない。もう疲れた。もう何も考えたくない。

お湯が真つ赤に染まりだし、次第に頭がぼうつとし始めた。俺は何も考えまい、とバスタブの縁に頭をつけて目を閉じた。それなのに、何も考えまいと思ったのに、死が近づいてくると、楽しかった日々が、幸福だった日々だけが、頭に浮かび始めた。

ミミ。イーサン。お前たちの名前は俺がつけたんだ。

涙が頬を伝っていった。

お前たちをその名で呼べた時、本当に幸せだった。全てを疑う今この時でも、あの幸福は本物だと思えた。お前たちが笑うと、俺も笑った。お前たちが好きだ、というのは、俺だって好きになれた。

やっぱり本当だった。楽になろうと身勝手に死のうとしていたときだって、お前たちのことばかり思い浮かぶ。全ての幸福はお前たちに結びつく。やっぱり愛している。お前たちの幸福を願う心は、やはり愛だと言える。

その時、冷たい手で心臓を鷲掴みされたような鋭い恐怖が、ふと死にゆく私の身を奮い立たせた。

俺が死んだら、あの子たちはどうなるのだろう。

気づけば、私は血だらけの手首を湯から引き揚げていた。

権力者である俺が死ねば、この街は次のトップを求める。そしてまた、俺のような

愚かな男が玉座にかける。そしてどうなるか。まずイーサンは明らかに次のトップに利用される。あの子は一生暗殺者として使われることになる。そしてミミもまた、何か別の形で使われる。いや、もつとひどい目に合うかもしれない。

私は風呂場から転がり出た。床や壁に血しぶきをまき散らしながら、ベッドへ駆け込み、痙攣する手でシーツを剥ぎ取った。どくどくと血を出す血管をシーツで押さえると、白い布はたちまちどす黒く染まった。

きっと歴史は繰り返す。私が死んでも誰かが私の代わりをやる。そしてまた誰かが傷つき、死んでいく。この街は何十年もそんな歴史を紡いできた。創造のブラフマー、維持のヴィシュヌ、破壊のシヴァ。そんな風と同じ過程を辿りながら、滅んでは生まれ、滅んでは生まれ、まるで輪廻転生のようになる。そんな因果に、イーサンとミミは捕らわれる。そんなのはいけない。もう終わりにしなければ。そんな因果は俺で終わらせなければ。

何度も圧迫するうちに、やがて出血は止まった。大急ぎで包帯をきつく巻き付けた。まだ死ねない。あの子たちの生きていく未来を作るまでは。野心と非情さが力を得る街を終わらせるまでは。正義と優しさを持つ人物が、この街のトップとなるまでは。私は死なない。私の命は、正義のヒーローが悪に鉄槌を下すのに捧げる。私のような悪は、正義によって倒されなければならない。

だが、誰が。その正義のヒーローとは誰のことなのか。そこで、私は近頃部下が噂していた人物の名前を口にした。「パンダヒーロー」

手首の傷が癒えると、私はパンダヒーローについて調べ続けた。部下を使って、彼がどのような人物なのか、どこに住んでいるのか、周りの人間にどう思われているのかを、ただ黙々と調べ続けた。

分かったことは多々あった。ヴィシユヌ街に最近住み着いたこと。イーサンと同じ

く暗殺者だが、常に悪人だけを倒し、一般の人間には優しく、ヴィシユヌ街の人々には慕われていること。パンダの着ぐるみもいつも身に着けているせいで、素顔を知るものはいないこと。はつきりとした年齢は分からないが、どうやら若者ではあるらしいこと。

調べるうちに、彼は打ってつけの人物であるように思えた。しかし、数十年続いた街の因果を終わらせるには、英雄としての側面はまだ弱い、と感じた。いきなり私を殺させるわけにはいかない。段階を踏む必要がある。

その段階は、すぐに見つけることができず。意外な人物がそれだった。

ジョン・ヘイスティングスに再開したのは、シヴァ街の豪華な夜会だった。その夜会というのが、近頃酒の密造で巨額の利益を出し、ヴァルナ社の対抗勢力になりつつあったパールバティ社という会社の社長が開いたものだった。その社長というの

が、今まで名前も顔も公表しておらず、謎に包まれていたのだが、この夜会で初公表となるのだった。

夜会の席で、社長が壇上上がり挨拶をした。その顔を見て、私は驚きの前に暗く、苦い表情を顔に登らせた。隣のイーサンも、久々に感情を取り戻したように顔を曇らせた。

「長らく皆様には、ご挨拶をできませんで申し訳ございません」

社長はよく通る声で言った。この声は昔、公園で響き渡っていた、懐かしい声だった。しかし、彼の顔は昔の物とはまるで違っていた。私と同じものになっていた。

「パールバティ社社長の、ジョン・ヘイスティングスと申します」

夜会の後、ジョンは私だけを私室に招いた。

「久しぶり」

と、彼はそれだけ言った。アレックが死に、あれほどひどい別れ方をしたのに、ま

るでそんなことなかったかのようだった。  
「十年近く会っていなかったね」

私は沈み切った声で言った。私達のいる  
部屋は、まるで病室のようだった。

「どうして君が社長なんか……」

「騙されたんだ」

ジョンはぼつりぼつりと事の顛末を語り始めた。アレック亡き後、ジョンのバイト先の清酒工場の工場長である叔父が、禁酒法を利用したビジネスを思いついたこと。そのビジネスがマフィアと結びつき、着々と軌道に乗り始めたこと。ビジネスが成功にするにつれ膨らみ始めたリスクを背負わせるため、甥である自分を社長の地位につけたこと。

「今夜、君とイーサンを招いたのは、ただ単純に会いたかったんだ」

ジョンはため息をついて私にしなだれかかった。二つ年下のこの男を膝に寝かせて、その髪を撫でさすった。

「アレックを亡くして、俺は力を欲しがった。あんな風に死なないために、君のような力を身につけなきゃいけないって、焦っ

て思った。そこを叔父さんに付け込まれたんだ。最初は仕事が軌道に乗っていくのが楽しかった。でも段々それも辛くなっていた。何かを踏みつけ続けなきゃ走れない人生に疲れた。君に会いたかった。今の俺の気持ちを分かってくれるのは君しかないと思ったんだ。今になって何となく、あの冬の日、アレックの墓の前で君が何を思っていたか知ったんだ。会いたかったよ。俺のロバート。話を聞いてほしかった。顔を見たかった。でも叔父さんは、社長が若年だと露見し侮られては不都合だ、と言って俺を会社に閉じ込めたんだ。でも今年で三十になって、ようやく解放された。やっと君に会えた。でも……」

ジョンは身を起して私を抱きしめた。頬ずりして、彼はむせび泣いた。

「でも、俺はもう若くなくなった。いつでも道に迷うことができた、あの十六歳の夏はもう来ない。俺は一生、パールバティ社に縛り付けられて、やりたくもない仕事をやらされて、恐怖と絶望の中で生きるんだ。ロバート、こんな人生嫌だよ……。いっそ

のこと死んでしまった方がずっとずっとマシだよ」

「かわいそうなジョン……」

私達は一塊になってベッドに転がった。希望も若さも失ったジョンの顔は、ひどく年老いて見えた。そして三十を越した私も、もう昔のように無茶のできる美しさを失っていた。

「そんなに辛いなら、殺してもらおうか」  
私はジョンの髪を撫で、あやすように言った。

「誰が殺してくれるというんだ」

「パンダヒーローが」

力なく項垂れていたジョンがはっと顔を上げた。

「この街は生まれ変わるんだ、ジョン。パンダヒーローがこの街の悪を次々に倒し、最後に私を殺せば。人々は悪を倒した、善の心を持つヒーローに従い、そしてようやくヴァルナの因果は終わる。誰も心を殺してまで力を得ようとはしなくなる。誰も傷つかなくなる。みんなが笑って暮らせるようになる。ジョン、力を貸してくれ。我ら

がパンダヒーローのために、最初に殺される悪になってくれ」

「そうすれば、みんな救われるようになるのか。俺の妻も息子も、もうこんな辛い運命を辿らずに済むのか？」

私は何も答えなかった。

「ロバート、俺はヒーローになりたかった」  
ジョンは涙を流したまま、静かに瞳を閉じた。瞼の隙間から、輝く雫が溢れていた。

「戦争に行ったのも、叔父さんに利用されたのも、みんなこのせいなんだ。ヒーローになりたかった。力を持ち、みんなから尊敬されるヒーローになりたかった」

パンダヒーローにまずはジョン・ヘイスティングスを殺させる。その準備は着々と進んでいた。しかし悩んだのは、ミミをどうするべきかだった。

まだ幼い女の子をどこにやるべきなのか。誰があの子を愛し、守ってくれるのか。散々迷ったが、やはりそれもパンダヒーロー

ーが適任だと思った。やがては街の英雄となる彼なら、きっとミミを大切にしてくれるだろう。

ミミは前金としてパンダヒーローに渡す。有り体で言えば人質だが、そんな非情な突き放し方をすれば益々彼女は私を憎み、パンダヒーローを愛するようになるだろう。それでいいのだ。

この話をした時、ミミは当然のように怒った。イーサンも茫然としていた。私はどうということもない、という冷たい表情でやり過ぎしたが、本当は唇が歪みそうになるのを必死で耐えていた。

パンダヒーローに初めて会った日は、君も覚えているはずだ。午後だったな。

噂通り、彼はパンダの着ぐるみを着こみ、素顔は全く分からなかった。しかしその奥から聞こえてくる声は若々しかった。ミミと共に過ごす相手が若いことに、私は安心した。

彼はまるで、自分に自信がありながらも

どこか心の奥で自分を嘲っているような、そんな不安定な少年のように振舞っていた。話しながらも、私は少し不安だった。この彼が、ミミと共に過ごすのだろうか。私の友達を殺すのだろうか。こんなに若いのに、どこかで諦めているかのような気色を持つ彼が。

しかしそんな不安は、私がミミの話を出した時に消えた。

彼は激昂した。人を金にすること、何の関係もない少女を巻き込むこと、そんなことに彼は怒り、私を罵った。自分と同じく薄汚れた仕事をしながらも、彼は忘れていなかったのだ。人を慈しむことがどれほど大切であるかを。

彼になら、安心してミミを託せる。私はパンダヒーローがぎこちなくミミに話しかけるのを眺めながらそう思った。彼がきっと彼女を幸せにする。まだミミは幼いが、やがて二人の間には愛が芽生え、パンダヒーローがミミのために力を使うだろう。そしてミミへの愛はやがてこの街全体に注がれる。そして私への殺意の原動力となる

だろう。それでいい。パンダヒーロー。ライターもシャープペンシルも知らないまだ青い若者。それでいい。

彼はミミを連れて書斎を出て行った。私は扉を振り向かなかった。赤い髪が私の頬を撫でて消えていった。今生の別れだった。これで私は二度と、ミミには会えなくなった。だが、これでいい。これでよかつたんだ。後の心配はただ、パンダヒーローが私の親友を、苦しまずに一発で殺してくれるか。それだけだった。

私がミミに託した未来、チョコレートの包み紙は、部屋に置いてきぼりにされていた。メイドからそれを受け取り、彼女にチップを渡すと、そうそうに追い返してため息を吐いた。

お前はこれすらも忘れてしまったんだね。お前の母さんと私を繋ぎ、お前と私を繋いだこれが何であったか、もう忘れてしまったんだね。

もう一度扉を開けて人を確認する暇も

なかった。唇が震えて私は机に突っ伏した。涙が滝のように流れ、私は激しい泣き声を上げた。何度も拳で机をたたき、声が漏れるかもしれないのに大声で泣き喚いた。

もう会えない。俺の最後の希望だったあの子にはもう会えない。俺の未来、俺の進む道、俺の光。もうあの子は俺のところに戻ってこない。俺はあの子の所に帰ってやれない。ミミ。お前が唯一覚えていたその名前は、俺がつけた。お前は俺の子供だった。

リーズがようやくはつきりと怒りを見せたのは、ミミがいなくなってからだだった。彼女はパンダヒーロー同様、ミミを前金として手放したことに怒った。その怒りは決して見せかけの物ではなく、心からミミを思っていたことがよく分かった。

やはり、あなたは自分の過去をミミに話したりはしなかったのですね。

私は心の中でそう呟いた。解雇という名目でリーズは去っていった。最後の最後に、

強烈な怒りを私の元へ残していった。

グレース。今はお怒りになるのも分かります。でも、これでいいのです。これで何もかも上手くいきます。あなたの青春を、誇りを、婚約者を奪った償いをやつとできるのです。

私は、彼女の赤い服の粒子がまだ煌めいているような空気の中、目を閉じた。

これでお別れです。どれほどあなたに憎まれようとも、私はあなたに出会えてよかったと思っています。あなたは最後まで美しい。あなたほど美しい人は他にいない。

ジョンは確実にパンダヒーローに殺される準備をしていた。妻に離婚を言い渡し、別の町に移住させ、社長の引継ぎも済ませ、決行当日の打ち合わせを私と何度も重ねた。

一方で、イーサンは変わらず黙々と私に従い続けるだけだった。「邪魔になったからジョンを殺す」と告げた時はさすがに動



揺したようだったが、すぐにいつものように寡黙に大人しくなった。その瞳は一層暗く、落ちくぼんだ影を常に纏っていた。

しかし、少しの変化があるとすれば、彼はパンダヒーローに興味を示しているようだった。愛する妹を引き取った男だ、ということも関係しているのか、「二人の様子を見に行つてこい」という命令にも二つ返事で従った。

イーサンの報告で、あの二人が大層仲良く日々暮らしていることが分かりほっとした。心なしか、イーサンも安心していろいろだった。

しかし、パンダヒーローの話が出ないところでは、彼は相変わらず物静かに、凍り付いた表情で過ごした。書斎の出窓に腰掛け、じつと遥か下にあるごみごみとした街を見つめていた。そんな彼が何を考えているのか、私には分からなかった。既に崩れ去ってしまった青春時代の友情を儚んでいるのか、死に行く友人を助けられない自分を卑下しているのか、妹との別れを悲しんでいるのか、パンダヒーローに自分を重

ねているのか、それともヘンリー・シャロームのことを思っているのか。そんな彼を、私は何気なしに煙草を吹かしながら、それでも目は鋭く見つめていた。彼とも、もうすぐ一生会えなくなるのだから。

パンダヒーローは見事だった。何の狂いもなく、一撃でジョンを仕留めた。そして見事、民衆の視線を独り占めにした。怯える人もいたが、ジョンが懸命に自分の悪評を流してくれたおかげで、彼は一部羨望の眼差しを得ることができた。

ジョンの遺体は、パトリックの教会へ運び込まれた。彼の傍らに、イーサンは跪いた。ぱっくりと割れた頭の傷に、そっと指先を触れさせ呟いた。

「ああ、きつと、苦しむ暇もなかっただろう」

パトリックは青ざめた顔で私に近寄った。そして、頬に強烈な一撃を食らわせた。

「よくもジョンを！」

彼は狂乱して叫んだ。そして何度も私を

殴り続けた。

「どうしてこんなむごいことができた！いくら悪徳企業の社長だからと言っても、友情だけは忘れていないと思つたのに！」

「やめろ、ジョン！」

イーサンが彼を羽交い絞めにした。

「あの子に聞こえるだろう」

パトリックは手を下ろした。そして床に座り込み、ジョンの遺体に取りすがつて泣いた。私は血まみれのジョンの顔を黙って見下ろした。

ジョン。お願いだ。苦しくなかった、と言ってくれ。痛くなかった、と笑ってくれ。お願いだ、そんな顔をしなくてくれ。辛くなってしまふ、お前を亡くしたということに泣き出したくなつてしまふ。こんなことをパンダヒーローがしたんだと思うと怖くなつてしまふ。ジョン。俺に勇気をくれ。未来を切り開くために進んでいけ、と俺に言ってくれ。

ジョンが死に、パンダヒーローに再び会

った時、私は安堵と不安の両方を持つことになった。とりあえず、パンダヒーローとミミは確実に想い合っていることは知れた。しかし困ったのは、予想以上に彼が子供だったことだ。

彼は十五歳だった。そしてその心も、少年そのもので、考えも信念もふらふら揺れ動いていた。

彼は口汚く私を詰った。別にそれはいい。むしろこうして私を嫌ってくればこちらとしては都合がいい。しかし彼が、私を女性に關してもふしだらな野郎、と呼んだ時、私は自分の目的も忘れて彼を怒鳴りつけてしまった。いくら自分を悪に仕立て、パンダヒーローに殺させようとしていても、絶望に沈む中何とか美しく仕舞ってあったアンとの思い出に土足で踏み入れられたように思えた。それがどうしても許せなかった。

この子は自分の関わりのない人の生活には、少しの考えもないのかもしれない。そう思って私はすぐに怒りを収めた。そして、自分やイーサンの過去を語った。あ

くまで最後は自分がひどく見えるようにしたが、私は彼に、自分には考え付かないほどひどい生き方をした人もいることを知ってほしかった。思いやりというものは、幅広く人に与えなければいけない、ということ。そうしなければ、お前は無意識に誰かを傷つけてしまう。

私の話を聞き、彼は困惑してしまったようだった。絶対悪だと思っていた人物の意外な側面に触れて、自分を見失ってしまった。やがて彼は気まずそうに部屋を出て行った。

彼が帰った後、私はしばらく考え込んだ。彼の若さがこれからどんな影響を及ぼすか。あの迷いから答えを導き出せるのか。人々を救うヒーローになれるのか。

しかし、そんな不安よりも、やはり強力な安堵の方が上回っていた。

彼はミミを愛している。彼は私よりも、ミミのために歩きたいと思っている。それだけは確かだ。

パンダヒーローは確実にミミとの愛を育んでいる。そしてもう一つ、私は確信していることがあった。

イーサンとパンダヒーローとの間に芽生えた、奇妙な絆だ。

同業者同士、何か思う所があったのだろうか。とにかくこの二人は、自分でも気づかない内に、お互いに精神の繋がりを求め、お互いに自分の姿を見ていた。これに気づいた時、私は確信した。

イーサンとの別れが来たことを。

私は彼を解き放つための策を巡らせ始めた。これはミミの時よりも難しかった。まだ幼く、私と過ごした時間が短いミミと違って、イーサンはあまりに私を知りすぎ、私を愛しすぎ、年若くあっても知らぬ世界に飛び出すには老いすぎている。彼はどうしたら私から離れるだろう。私のいない世界で、誰を愛し、どんな道を選んで生きていけるだろう。

しばらく彼の動向を探るうちに、彼を私に代わって愛してくれる人は見つかった。それが君だった。誰の前でも笑顔を見せな

い彼が、唯一寛いだ表情をするは、君の前でだけだった。なぜ彼がこれほどまで君に惹かれたのか、それは彼にしか分からない事だが、君になら彼を任せられる、とそう思った。

イーサンとの別れは、君が宿直で会社に留まる日、パンダヒーローの目の前で行った。これには二つの目的があった。一つは文字通り、イーサンを私から離すこと。そしてもう一つは、パンダヒーローの怒りを煽ること。

私はイーサンに「もう役に立たなくなつたから出ていけ」と言った。彼は必死に懇願した。「捨てないでくれ。一人にしないでくれ」と。こんなに感情の表れた顔は、本当に久しぶりに見た。お前も昔は、こんな風に思いを顔に出していたのに。そう思うと寂しくて、私は唇をかみしめた。ひどいことを言う。それだけで私を見放すほど、イーサンの愛は軽いものではなかった。だから殴った。殴って蹴り飛ばして、急所は

外しながらも血が出るまで痛めつけた。イーサンはどうとう泣き出した。しかしその目に恐れはなかった。絶望と、困惑だけがそこにあった。やがて彼は、書齋を駆け出て行った。

パンダヒーローも、困惑の渦に叩き落されていた。目の前で、密かに絆を紡ぎつづあつた人が痛めつけられ、驚きと恐怖で固まっていた。そんな彼に私は迫った。愛する少女がいる彼にいやらしく迫り、彼の嫌悪を煽った。パンダヒーローはすぐに激昂した。

私を突き飛ばし、「人でなし！」とそう叫んだ。

痛む肩を摩りながら、私は一人取り残された書齋に座り込んでいた。考えるのは、出て行ってしまったイーサンのことだった。

痛かっただろう。怖かっただろう。でもこれも全てお前のためだ。今は辛くても、お前はすぐに新しい家族を見つけられる。私なんかよりずっと正しくお前を愛してくれる人がすぐそばにいる。お前はもう銃

を持つこともない。誰かを殺すこともない。ただの普通の人間として、もう一度人生をやり直せる。

流す涙はこれが最後だった。もうこれほど泣くことはないだろう。

許してくれ、イーサン。母さんを亡くして何もかも諦めきっていた私に唯一生きる希望をくれた子。そんなお前を、私は幸せにできなかった。私の勝手でお前を傷つけてしまった。どうか新しい人生では、幸福を掴んでくれ。

君がイーサンと暮らし始めたのを知った時、本当に嬉しかった。あの時笑ったのは、別に馬鹿にしていたとかではなかったんだ。ただ本当に嬉しかったんだ。あの子が新しい人生を送るチャンスをつかめたんだから。

ミミとイーサンに新しい道を与えられた。街の人々も、パンダヒーローに注目し、私への思いを恐怖から憎悪に変えていった。そして私はヴァイオレットとヴァレリ

アに、このビルの間取り図を渡した。いざパンダヒーローが私を殺しに来た時、有益になる情報を彼女らに託したのだ。この間取り図を二人がパンダヒーローに渡せば、いくら私の元愛人でもきつと彼は彼女らにひどいことはしないだろう。こうして、私を殺し、パンダヒーローがトップとなる準備は確実に整っていった。

そして昨日。昨日の出来事は、その最終準備だった。

先週、私はジェフェリーと昌義、マッテオの三人を呼び出した。

「町中でミミを襲って連れ戻せ。できるだけ派手にな。したらパンダヒーローが怒ってやってくるだろう。彼がバットを振ったらお前たちは応戦しろ。そして負ける。必ずパンダヒーローが勝つようにするんだ」

「何ですって？」

ジェフェリーが聞き返した。

「何が目的でわざわざ自分が不利になるようなことをするんですか」

「質問するな。ただお前たちは言われたと

おりにやれ」

「お嬢様を襲えと言うんですか」

昌義が震える声で答えた。

「旦那様、そればかりはできません。僕にはお嬢様を傷つけること何かとても……」

「最後の頼みだ」

私は深々と彼らに頭を下げた。数えてみれば、もう十年近くの付き合いになる彼らだった。

「私がお前たちに命令するのはこれで最後だ。この任務が終われば、お前たちを解雇してニューヨークの会社に移す。そこで新しい人生を始めてほしい」

三人は黙っていた。しばらく重い沈黙が流れた。最初に口を開いたのはマッテオだった。しかし私ではなく、昌義に語り掛けた。

「なあ、マサ。この会社に入ってよかったと言えることは、お前とお嬢様に出会えたことだ。だからさ、こんな命令がお嬢様とパンダヒーローの絆と強めて、お前とニューヨークで新しい人生を歩んでいくことに繋がるなら、俺はやろうと思うよ」

「これが幸福に繋がると言うの」

昌義はまだ考えきれないという風に呟いた。

「そう約束できるんだな？」

ジェフェリーが私に聞いた。厳しい瞳が私を見つめた。

「もちろんです、約束します。この命令があなた方と、そしてミミやイーサンの幸福に繋がると、必ず約束します」

「お嬢様には傷一つつけない」

ジェフェリーは最後にそう言った。

「絶対に」

「ジェフェリーさん」

私はもう一度深く頭を下げた。

「ありがとうございます、ジェフェリーさん、ありがとうございます」

そして昨日、決行の時間が近づくと、私は粗末な服に着替え、帽子を深く被りマスクをすると、シヴァ、ヴィシユヌ、ブラフマーの三つの街の交差点に出かけて行った。顔を覆っているせいで、誰も私だと気

づかなかった。

時間通りに、彼らは事を起したようだった。やがてミミが通りに駆け出してきた。膝をすりむき、必死に助けを呼ぶミミ。久しぶりの姿。そんな彼女に、私は駆け寄りたくなった。怖がらないで、と言いたくなかった。

しかし、パンダヒーローはすぐにやって来た。ミミを取り押さえた三人に、激しい怒りの声を上げて襲い掛かった。

昌義とマツテオはすぐに打倒された。血を流して倒れた昌義を庇うように、マツテオは倒れこんだ。

とどめを刺そうとするパンダヒーローを、ジェフェリーがミミを人質にして制した。パンダヒーローは動揺したらしい。すぐに持っていた角材を下におろそうとした。しかし、ミミが叫んだ。

「ダメよ！ 従ってはダメ！」

恐怖に顔を引きつらせながら、彼女は必死に叫んでいた。

「従うなら自分の心に従いなさい！ あなたはもうロバート・クロスの手足じゃな

い！ たった一人のヒーローなのよ！」

私は大きく口を開いた。

「そうだ、パンダヒーロー。お前はヒーロー。強い力を、弱者のため、愛する者のための使う、ただ一人のヒーロー！」

「いいぞ！ やっちなまえ、パンダヒーロー！」

私は建物の影から、有らん限りの声で強く叫んだ。熱く、大きく、力強く、ヒーローを立ち上がらせる声を、私は上げた。

「頑張れ！ パンダヒーロー！ お前ならやれる！」

私の声が、群衆を熱した。彼らは口々に叫び始めた。彼を鼓舞し、敵が誰なのかを確認する声。そんな声がようやく一つに固まってこう叫んだ。

「いいぞ、パンダヒーロー！ やっつけろ！ 我らのヒーロー！ 立ち上がれ！」

パンダヒーローは迷いを断ち切ったように大きく腕を振り上げた。その腕から放たれた角材が、ジェフェリーの額を打った。

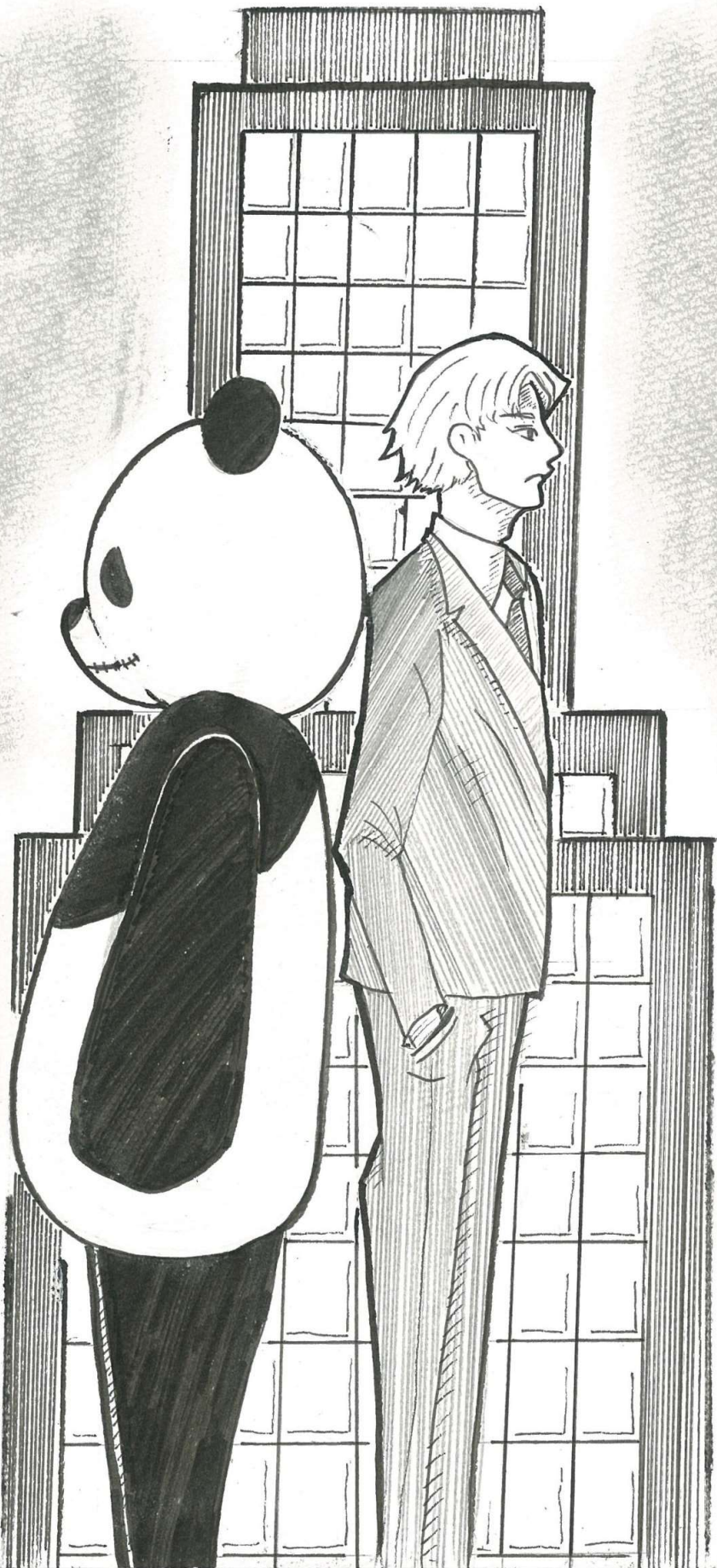
「俺は決めたぞ！」

彼は空を向いて高く叫んだ。両腕にしつ

かりとミミを抱いて。

「もうロバート・クロスなど知ったことか！ もうあんな男に従うもんか！ 俺は断固抗ってみせるぞ！ ヴァルナを倒してみせるぞ！」

人々の歓声を背に受けながら、私はここに戻ってきた。全ての準備が整った。後はパンダヒーローが、希望をもたらしにやってくるのを待つだけだった。



夜が明けた。もう私の話はお終いだ。これで君は全てを知った。私の過去、イーサンの過去、ミミの過去。そして今起こり行く革命の裏側。

この話を君にしたのは、全ての未練を断ち切りたかったからだ。誰かに語ることで、心と口からこの過去を切り離して、何も思いません。死にたいからだ。そんな身勝手な理由で、君の大切な一夜を使ってしまった。すまない。ありがとう。君には感謝しきれないよ。イーサンを愛してくれたこと、あの三人を介抱してくれたこと。おかげで三人とも軽症で済んだ。それから、私の話を聞いてくれたこと。

ボブ。私はもうすぐ死ぬ。パンダヒーローがもうすぐ私を殺す。そして、彼がこの街のトップとなる。そんな未来がもうすぐやってくる。

でも、そんな未来が過去になった時、どうか君はこの話を誰にもしないでくれ。君のみに留めておいてくれ。そして決して言わないでくれ。私がどれだけ深く、ミミとイーサンを愛していたか。

(ブルーアイズヒーロー完)

「ではあなただったのですね！　こんな  
馬鹿げた、こんな残酷な革命なんか起した  
のは、あなただったのですね、ロバート！」  
(パンダヒーローに続く)